

第二次世界大戦とオーストラリア——その2

「母国」イギリスの孤立

鈴木 英 夫

1. はじめに

本論文に先行する『第二次世界大戦とオーストラリア——その1』⁽¹⁾では、第二次大戦開戦以前と開戦直後のオーストラリアの事情と状況、および関連するヨーロッパの状況を述べた。1939年9月1日、ヒットラーのドイツ軍がポーランドに侵入し、9月3日、英仏両政府はドイツに対し宣戦布告した。同日の数時間後、大英帝国の一部をなすオーストラリアのメンジス首相は、ラジオ放送を通じてオーストラリア国民に対し、オーストラリアがドイツとの戦争状態に入ったことを宣言した。9月15日、オーストラリア政府は海外派兵を念頭に志願兵募集を決定、1個師団分の兵力新設を開始した。新たな師団はオーストラリア第6師団と命名され、師団長にはトーマス・ブレイミー少将が任命された。同師団は新設の3個旅団、つまり第16、第17、第18旅団により編成された。第16はシドニーのあるニューサウスウェールズ州の志願兵、第17はメルボルンのあるビクトリア州の志願兵、第18旅団はその他の州の志願兵によって形成された。各旅団は新設後ただちに訓練に入る。11月28日、オーストラリア戦時内閣は、先遣隊120人を（同じくイギリス軍をサポートのため派兵されるニューージーランド軍の先遣隊と一緒に）オーストラリアから出港させ、訓練基地設定やイギリス軍との事前協議のため39年12月15日に中東に向かわせることを発表した。

戦闘部隊の第一陣として、主に第16旅団が

らなる6600名（旅団長アーサー・サミュエル・アレン Arthur Samuel Allen 准将）が、1940年1月9日シドニー湾から出発した。ニューージーランドもその4日前、1月5日に1個旅団（NZ第4旅団6500名）⁽²⁾を第一陣として出港させていたが、両国合同の輸送船団が編成され、両国派遣軍は共に中東に向かう。オーストラリア兵の目的地は、イギリスが委任統治するパレスチナ。パレスチナで更なる軍事訓練を行い、ヨーロッパにおけるイギリス・フランス連合軍の軍事活動に参加する予定だった。ニューージーランド兵はエジプトのカイロの南側にある基地で訓練に入り、その後同じくヨーロッパに向かう予定だった⁽³⁾。これら両国の部隊には、本国に残る旅団（オーストラリア第17、18旅団、ニューージーランド第5、6旅団）が、後から第2陣、第3陣として合流し、それぞれ中東において師団形成を完了させる予定だった。

オーストラリア第16旅団とニューージーランド第4旅団、合計約13,000名を載せた船団は、インド洋から紅海に入り、2月12日スエズ運河のイスマイリアに到着した。これら南太平洋の自治領（Dominions）からの第一陣を歓迎するため、エジプトにおける英陸軍司令官アーチボルド・ウェイベル大將、駐エジプトイギリス大使サー・ランプソン、またこの時のためにイギリスから駆けつけたアンソニー・イーデン自治領担当相（Secretary of State for Dominion Affairs）が、彼らの船団にやってきた。オーストラリアからの兵士たちは上陸後、鉄道でパレスチナに向かった。拙論『——その1』では、

主にここに至るまでのオーストラリアの状況およびヨーロッパの概況を述べた。

第二次大戦開戦日は、確かに英仏が宣戦布告した39年9月3日である。しかし、ドイツと英仏の戦力が初めてぶつかり合うのは7か月後の40年4月初旬、ノルウェーとその領海においてである。そしてお互いの陸軍同士が大規模に激突するのは更にひと月ほどたった5月中旬だった。開戦から両軍戦闘開始までの期間は、まやかしの戦争 Phony War とか奇妙な戦争などと称されるが、交戦状態にあるはずの西欧3大強国は、開戦後ほぼ7か月にわたり戦火を交えなかった。しかしひとたび熱い戦闘が始まると、ヨーロッパ大陸の軍事情勢は急転、6月中旬までには誰も予想もしなかったような状況が出現する。つまりフランスが事実上ドイツに降伏し、ヨーロッパの大半がドイツの支配するところとなり、イギリスがヨーロッパにおいてほぼ完全に孤立してしまうという状況である。

全部ではないにせよ、大半のオーストラリア人にとって、イギリスは母なる国だった。自分たち、自分の親たちは、イギリスから来た、我々の言葉も生活様式も政治も学校教育も、イギリスにルーツがある。自分たちの経済や国の安全は、強大な母国との固い絆が基礎となっていた。

本論文の後半で述べるように、イギリスは“孤立”を何とか生き延び、生き延びることにより、5年後の1945年、連合国側がドイツと日本に対して勝利するための土台の重要部分を守り、提供した。その土台の部分の防衛は、ギリギリのところ成し遂げられたものだった。幾つか手順が異なれば、実際とは異なる結末、異なる未来をもたらしかねない危うい戦いの成果だった。

実際イギリスは生き延び、後には勝利への道をたどることになるが、その過程で、オースト

ラリアにとって、歴史的な意味を持つ変化の流れが生まれていく。その流れは遂には、イギリスがオーストラリア（やニュージーランド）に与えていた約束、つまり、オーストラリアの安全が脅かされたときには、イギリスが守るという約束を果たせなくなり、オーストラリアが次第に母国との関係を否応なく調整せざるを得なくなるという結果をもたらすことになる。イギリスが世界的強国として明確に維持され、オーストラリアに脅威をもたらす勢力を寄せ付けない……ことがオーストラリア国防の根幹だった。その根幹が半永久的に揺らいでしまったのである。

イギリスがどのような具体的経緯の後に孤立していったのかを観ることは、オーストラリアにとっての第二次世界戦およびその後を考えるにあたって、重要であると考えられる。本論文は紙数の都合もあり、オーストラリアにとっての「母国」、イギリスが孤立していく過程を中心に述べていくことにする。

本論文の構成は以下のようになる。第2節では“まやかしの戦争”が終わるきっかけとなったスカンジナビア半島における戦争を述べる。ソ連とフィンランドとの戦争が、イギリスとフランスを巻き込むことになり、それがナチスドイツのノルウェー、デンマーク侵略を招き、同半島とノルウェー沖におけるドイツ軍対英仏連合軍の戦いとなる。この戦いは、ひと月ほどでノルウェー、デンマークに対するドイツの支配という形で終了する。第3節では、スカンジナビアでの戦争終了後ほぼ即座に、ドイツ軍の中立国オランダ、ベルギー、ルクセンブルグ、そしてフランスに対する侵入が始まることを述べる。フランスにおいて英仏連合軍はひと月ほどの戦闘の後にドイツ軍に敗北、フランスは事実上降伏する。ドイツは西および東ヨーロッパの大半を支配し、イギリスは孤立することになる。第4節は、〈孤立したイギリス〉対〈ヨーロッ

パを支配下に置いたドイツ〉の戦い、バトル・オブ・ブリテンといわれる空軍どうしの戦争を述べる。イギリスはこの戦争に負けなかった。ヒトラーに、イギリス打倒を結局は諦めさせる成果をあげた。とはいえロンドンを始めイギリスの大都市は、ほぼ10か月にわたりドイツの空爆 Blitz に耐えなければならなかった。第5節は、これらのイギリスの戦いの中で、オーストラリア軍が果たした役割に触れる。

本論文は「オーストラリアにとっての第二次世界大戦」に関するより長い物語の一部をなすものであり、ここではオーストラリアそのものへの言及は少々限られたものとなることをお断りする。

2. フィンランド・ソ連の戦い（冬戦争）とドイツによるノルウェー、デンマーク侵略

2.1 フィンランド・ソ連の「冬戦争」を巡るイギリス、フランス、ドイツ

39年8月23日、ヒトラーとスターリンは独ソ不可侵条約に調印し、世界を驚かせた。英仏やアメリカは勿論、世界の共産主義者や全体主義者たちも同様に、独ソの新たな合意に驚いたのだった。エーッ彼らは敵対していたはずではなかったのか!?（日本もショックを受けた。一方でソ連とノモンハン事変を戦い、他方でドイツとの関係の更なる強化に注力していた日本の平沼騏一郎首相は、独ソ不可侵条約締結のニュースにすっかり仰天してしまい、……今回帰結せられたる独ソ不可侵条約により、欧州の天地は複雑怪奇なる新情勢を生じ……というまさに複雑怪奇なセリフを残して……突然辞職してしまう。このことは余りによく知られている。）

独ソ不可侵条約の裏側には、秘密協定が付随していた。その秘密協定において、フィンランド、エストニア、ラトビアはソ連の勢力圏

sphere of influence に入ることが合意されていた⁽⁴⁾。（独ソによるポーランド分割直後、リトアニアもソ連勢力圏に入ることになる。）ソ連は39年10月、国境を接するフィンランド政府に対し、ソ連・フィンランド国境を西側に移動させてカレリア地方の相当な領域をソ連に割譲すること、フィンランド湾の幾つかの島を割譲すること、北極海に面する不凍港を含む地方の租借、フィンランド最南端のハンコ Hanko 港および周辺をソ連が海軍および空軍基地として租借するなどの要求を突き付けた⁽⁵⁾。

フィンランドはこれを拒否し、交渉は11月13日に決裂、フィンランド政府は軍をカレリア地方のソ連・フィンランド国境に配備した。11月30日、ソ連軍は国境を越え、ヘルシンキはソ連空軍に爆撃され、ソ連とフィンランドは「冬戦争」に突入する。

スターリンはヒトラーと不可侵条約を結ぶことで西側世論を仰天させ、敵に回していたところであったが、強大な赤軍に対して、小国フィンランドの軍と国民が勇敢に抵抗するという状況が出現し、ソ連に対する西側の反感は更に強まる。雪深い森林地帯における冬戦争前半では、侵入したソ連軍に対しフィンランド軍は決して負けていなかった。フィンランド軍がソ連軍の戦車に投げつけたガソリン入りの新手の“手榴弾”は、その後西側で「モロトフカクテル」と呼ばれるようになる。西側はこれに喝采した⁽⁶⁾。モロトフ（ロシア外相）よ、これでも喰らえ!!

必死に戦う小国フィンランドを応援しなければという世論が英仏に、アメリカにすら広まっていく⁽⁷⁾。国際連盟も12月14日、この侵略を非難してソ連を追放する。冬の戦いへの備えが充分でなかったソ連は、12月末には後退を見せたが、翌年2月に攻撃を再開、マンネルハイム線を突破しフィンランド軍を追い詰めはじめ⁽⁸⁾。

フィンランドを助けようという世論の高まりに押されて、英政府は援軍を派遣することを検討し準備せざるを得なくなる。フランス政府では、ダラディエ首相自身がフィンランド支援を熱心に提唱した⁽⁹⁾。12月19日の英仏政府合同の最高軍事協議会 Supreme War Council は、フィンランド支援を決定する。しかし支援を実際に行うためには、フィンランドに国境を接するノルウェーとスウェーデンの領海、領土を通過、利用する必要があった。ノルウェーもスウェーデンも、英仏軍の通過、利用の要求を受け入れなかった。交渉は進捗せず、英仏はそれでも強行すると決意した⁽¹⁰⁾。そしてついに40年3月12日、その第一陣を送る準備が整う。巡洋艦、駆逐艦の艦隊、14,000人の英軍が出港命令を待つばかりになった⁽¹¹⁾。フランスのダラディエ Daladier 首相は3月2日の段階で50,000人の志願兵と爆撃機100機をフィンランドに送ることを発表していた⁽¹²⁾。

しかし艦隊出航寸前の3月12日夕刻、赤軍の猛攻を受けて後退を続けていたフィンランド軍がついに屈服し、フィンランド政府はソ連の要求を受け入れることになったという情報がロンドンに入って来る。英の援軍は出港を中止、上陸軍派遣は停止された。この時イギリスは陸軍2個師団をフィンランド支援のため順次派遣する計画だった。これをノルウェーのナルビック Narvik とトロンヘイム Trondheim に上陸させ、フィンランド支援の軍事活動に投入すると計画されていた。これらの師団は、もともとドイツの攻撃に備えフランス-ベルギー国境に向けて送られるはずの兵力だった。これを急遽フィンランド支援に振り向けたのである。そのフィンランド支援が中止となり、この兵力は9個大隊を残して、他は元の計画通りフランスに派遣された⁽¹³⁾。

フィンランドは1917年までロシアの一部だった。同年10月のロシア革命のすぐ後の12

月末、もともとフィンランドの独立に同情的だったレーニンが、フィンランドの独立を受け入れたのであった。スターリンはこれを逆転させたことになる⁽¹⁴⁾。

英仏のフィンランドに対する援軍派遣は無くなったが、ソ連対フィンランドの「冬戦争」勃発以来ここに至るまでの英仏の世論や政府の動きは、ヒトラーの警戒心を強烈に高めることになり、ノルウェー、デンマークへの侵略につながっていく。こうなっていくには、密接に関連する2つの理由があった。

一つは、英仏軍がフィンランドを支援して兵力や軍事物資をスカンジナビア半島に上陸、揚陸させるならば、英仏は半島に軍事拠点を築くことになろう。英仏がフィンランドやノルウェーなどに拠点を持てば、スカンジナビア半島全体に様々な、強力な影響力を持つことになり、またドイツのノルウェー海、北海、バルト海、ボスニア湾およびそれらの上空域での軍事活動その他を阻害し、ドイツの安全そのものに影響が及んでくる。戦後になって旧ナチスドイツ軍の秘密文書を連合軍が入手し、それを読む立場にあったチャーチルは、ドイツ海軍総司令官であったレーダー Raeder 海軍大将が、ソ連・フィンランド戦が始まる前の39年10月3日の段階で、まさにそのような懸念を述べた文書をヒトラーに提出していることを指摘している。英仏がノルウェーに拠点を持ったら我々は危ない、我々の方が基地を築くべきであるとレーダーはヒトラーに進言していたのだった⁽¹⁵⁾。

ヒトラーは12月14日、ノルウェーの親ナチ国民党 Nationalist Party のリーダー、クイスリング (Vidkun Quisling) に会う⁽¹⁶⁾。クイスリングはドイツがノルウェーを支配下に置く案をヒトラーに持ちかける。これまたレーダーの証言であるが、この時ヒトラーはクイスリング

に対して、スカンジナビアは中立のままにしておいた方がよいのだと否定的に一応答えたものの、実はその日のうちにドイツの最高司令部 Supreme Command に対して、ノルウェー攻撃作戦を準備せよと命令を下したのだった⁽¹⁷⁾。その後、英仏によるフィンランド支援の動きが勢いを増し、しかも援軍の上陸先はノルウェーのナルビック港とトロンヘイムになるらしいとの情勢が伝わってくると、ヒトラーのノルウェー侵略の決意は更に固まった。

ヒトラーたちが警戒心を強めたもう一つの理由は、スウェーデンの鉄鉱石の問題だった。ヒトラーのドイツにとって、これも死活にかかわる重大事だった。これを見るためには、時間を遡り、少々迂回した説明が必要となる。

第一次世界大戦におけるドイツ敗戦の結果、アルザス・ロレーヌ Alsace, Lorraine はフランス帰属となる。アルザス・ロレーヌは、数百年にわたってドイツとフランスとが取ったり取られたり歴史を繰り返した地帯である。同地方のドイツ語表現は、エルザス・ロートリンゲン Elsaß Lothlingen。ここには肥沃な農地が広がると共に、鉄鉱石（これは特にロレーヌ地方）、石炭の地下資源が豊かに存在していた。19世紀のドイツ産業革命も、エルザス・ロートリンゲンの地下資源に頼るところ大であった。しかし第一次大戦における敗北の結果、ドイツはこの地方を大きく失い、この地下資源のほとんどはフランスのものとなる。大戦10年後の1928年には、フランスは鉄鉱石採掘量でアメリカに次いで世界第2位となる。大恐慌でアメリカの鉄工業がへたばっていた31年～35年には、世界1位にすらなってしまう（採掘された鉄鉱石に含まれる鉄の含有量では32年、33年に世界1位）。1920年段階で、ロレーヌ地方の鉄鉱石埋蔵量はヨーロッパ全体の48%と推定されていたのである⁽¹⁸⁾。表1は、1928年～38年にお

ける世界の鉄鉱石生産主要国の鉄鉱石生産量とその鉄石中の鉄含有量を示すものである。

鉄鉱石の大資源国となったフランスとは逆に、ドイツが第一次大戦での敗戦後にも継続保持できた鉱山からの鉄鉱石産出は、フランスのその20～30%、年によっては10%以下となってしまう。しかも、これらドイツ鉱山からの鉄鉱石の鉄含有割合は低かった。下の表は、1933年～44年、鉄鉱石に含まれる鉄含有量が測った場合、ドイツが必要とする鉄のどれだけの割合を自国の鉄鉱石で自給できたか、そしてどれだけを輸入に頼っていたかを示すものである。

表2は Rolf Karlblom Sweden's Iron Ore Export to Germany 1933-44 Scandinavian Economic History Review, Dec. 2011 Routledge (<https://www.tandfonline.com/loi/sehr20>) から拝借したものであるが、国際連盟統計、ドイツ、スウェーデン、ノルウェーなどの公的機関からの統計資料を基に、Karlblom が推計したものである。

第二次大戦以前のドイツは、自国の生産する鉄（鉄鉱石ではない）の20%～25%を国内産出の鉄鉱石から生産したにすぎず、それ以外は輸入鉄鉱石、特にスウェーデンからの輸入に大きく頼っていたのである。年によって違いはあるが、依存度はおおよそ40%+。スウェーデンからの鉄鉱石輸入が止まってしまったら、ドイツの鉄生産は成り立たなくなるという状況だった。スウェーデンからの鉄鉱石は、ドイツ重工業、そして兵器生産の土台を支えていたのだ。その鉄の含有率は、ドイツの鉄石よりもはるかに高かった。

戦争は、もちろん大量の鉄を必要とする。戦車、大砲、航空機、軍艦、輸送船、潜水艦、弾薬を生産しつづけなければならない。大量の鉄の供給無しに、戦争などできない。

表1 *The Major Iron Ore Producing Countries. Iron Ore Production*

Country	1928		1929		1930		1931		1932	
	Iron Ore	Iron-content	Iron Ore	Iron-content	Iron Ore	Iron-content	Iron Ore	Iron-content	Iron Ore	Iron-content
Algeria	1986	1003	2196	1098	2232	1196	901	447	467	234
Australia	686	443	867	572	952	628	362	199	555	366
Austria	1928	606	1891	597	1180	395	512	181	307	107
Chile	1525	1006	1812	1196	1689	1118	742	440	172	107
China	1349	*560	1645	*680	1420	*590	1483	*620	1198	498
Czecho-Slovakia	1779	578	1808	591	1653	536	1235	400	602	199
France	49191	*17000	50731	*18000	48571	*17000	38559	*13000	27559	*9000
Germany	6296	2089	6191	2080	5659	1845	2574	842	1319	443
Great Britain	11443	3433	13427	4028	11814	3662	7748	2402	7446	2234
(Br.) India	2089	1341	2468	1575	1879	1199	1651	1057	1789	1148
Italy	641	315	722	360	729	359	575	*285	427	214
Luxemburg	7027	2152	7571	2287	6649	1999	4765	1438	3213	999
Newfoundland	1509	815	1518	789	1473	766	546	283	323	168
Norway	531	*350	746	490	772	510	575	378	374	245
Poland	737	206	659	185	477	133	285	74	77	20
Soviet Union	6133	*3100	7997	*4000	10663	*5300	10591	*5300	12086	*6000
Spain	5785	2784	6559	3185	5525	2611	3190	1504	1760	803
Sweden	4669	2833	11468	6952	11236	6848	7071	4344	3299	2032
Tunisia	909	500	973	508	828	437	442	229	209	108
USA	63195	31649	74200	37226	59346	29681	31632	15876	10005	5028
Yugoslavia	440	242	428	236	431	237	133	69	27	14

Source: *Statistical Year-Book, 1928/29-1938/39.*

Figures marked with an asterisk are estimated.

and the Calculated Iron-Content, 1928-1938 (thousand of tons).

1933		1934		1935		1936		1937		1938	
Iron Ore	Iron-content	Iron Ore	Iron-content	Iron Ore	Iron-content	Iron Ore	Iron-content	Iron Ore	Iron-content	Iron Ore	Iron-content
761	381	1326	703	1675	907	1881	1010	2372	1260	*3000	1640
748	490	1281	847	1904	1257	1920	1267	-	1255	2287	1509
267	94	467	163	775	269	1020	364	1880	672	2648	898
565	350	973	584	849	517	1354	815	-	916	*1600	950
1127	457	1350	559	*1300	-	-	-	-	-	370	-
429	141	539	181	731	247	1183	359	-	*600	2090	-
30245	*10000	32015	*10450	32045	9832	33187	10186	37850	11520	33420	10100
2535	828	4214	1372	5852	1849	6384	2259	9792	2759	12351	3360
7581	2274	10757	3227	11070	3321	12905	3872	14443	4333	12050	3615
1248	803	1948	1250	2402	1534	2594	1666	-	1870	*2900	1790
526	264	502	252	569	286	825	449	952	*530	1030	520
3362	1036	3834	1174	4134	1269	4896	1476	7754	2440	5240	1507
326	170	515	267	673	350	739	384	-	853	*1700	887
474	309	567	368	765	497	822	599	1065	718	1425	972
161	50	247	78	332	105	469	149	780	248	872	270
14455	*7200	21509	*10800	26845	*13400	27918	*14000	-	*14600	*26500	*14600
1815	843	2094	986	2633	1240	*1700	960	-	460	2510	1180
2699	1686	5253	3250	7933	4859	11229	6853	14952	9136	13928	8411
291	150	547	281	504	254	722	387	947	480	820	460
17835	8918	24982	12584	31030	15608	49398	25078	74612	36991	76035	-
52	27	180	90	235	118	451	226	629	310	607	300

出所 Rolf Karlblom Sweden's Iron Ore Export to Germany 1933-44

ソ連・フィンランド戦争が勃発、英仏がフィンランド支援に動き始め、次に艦隊および派遣軍の出航準備が整う。それら一連の推移を見て

いたヒトラーは、その初めから、これはとんでもない事態になると感じたことであろう。英仏軍がスカンジナビア半島に上陸して、戦略的に

表2 *The Pattern of Germany's Total Consumption by Estimated Iron Content, 1933-1944*
(per cent)

Country	1933	1934	1935	1936	1937	1938	1939	1940	1941	1942	1943	1944
Algeria	3.0	1.7	1.4	2.6	3.0	2.6	1.9	-	0.4	1.2	-	-
Austria	-	-	-	-	10.6	6.8	6.1	-	-	-	-	-
Brazil	-	-	-	-	-	0.5	0.8	-	-	-	-	-
France	10.0	8.8	20.8	19.2	14.0	10.3	5.4	-	15.3	18.3	18.4	-
Fr. Morocco	-	-	-	-	-	0.5	1.2	-	-	-	-	-
Greece	1.3	0.8	1.3	0.9	0.9	0.9	0.9	0.0	-	-	-	-
Luxemburg	-	0.4	1.3	1.5	3.6	3.5	3.1	1.8	-	-	-	-
Newfoundland	3.6	3.1	1.2	0.8	3.3	3.8	2.2	-	-	-	-	-
Norway	5.3	6.2	4.1	3.2	2.7	4.9	4.6	0.8	2.0	2.7	1.5	-
Switzerland	-	-	-	-	-	0.2	0.3	0.4	0.6	0.6	0.4	-
Sierra Leone	-	-	-	0.9	1.0	1.7	2.3	-	-	-	-	-
Spain	5.9	5.3	7.6	4.7	5.2	5.7	3.7	0.0	0.6	2.8	1.6	-
Sweden	42.9	49.3	39.9	45.3	43.4	35.9	40.3	47.8	42.8	38.9	43.5	-
Tunisia	-	-	-	-	-	0.5	0.3	-	0.0	0.0	-	-
Other Countries	2.2	0.6	0.7	0.6	0.6	0.1	1.3	2.7	2.3	2.5	4.1	-
German prod.	25.8	23.7	21.9	20.3	21.6	21.9	25.8	46.6	36.0	33.0	30.4	-
Total	100.0	100.0	100.0	100.0	100.0	100.0	100.0	100.0	100.0	100.0	100.0	-

主要な地点、地帯、港湾、空港などをあいつらが押さえてしまったら、スウェーデンの鉄鉱石がドイツに入ってこなくなる!! ドイツの兵器生産はどうなるのか!! これから急速に兵器生産を増大させなければならないのに!!

実はイギリスでは、39年9月3日の対ドイツ宣戦布告後数日のうちに、スウェーデン鉄鉱石のドイツへの輸送を阻むべきだという戦略案が浮上していた。海軍大臣ウィンストン・チャーチルがその急先鋒だった。チャーチルは第一次世界大戦時にも海軍大臣をつとめたことがあったが、39年9月3日の対独宣戦布告の当日、チェンバレン首相から海軍大臣就任を要請され、その地位に復帰したのである⁽¹⁹⁾。対独主戦派の代表格だったチャーチルには、第一次大戦当時イギリスとアメリカ海軍が共同で、スコットランド沖から中立国ノルウェーの領海の内側にかけて機雷を設置し、ドイツに物資を運ぶ船舶をある程度ストップさせた記憶が生々

しかった。(第一次大戦の時は、英米が中立国ノルウェーに何度も働きかけてやっとノルウェー自身に領海で機雷を敷設することを承諾させたのだった……敷設が実施されたのはかなり遅く、第一次大戦終了間際の18年9月末⁽²⁰⁾。)チャーチルは、これをやらなければならない、これは戦略的に重要なのだ!!……と主張し始めたのだった。

チャーチルは39年9月29日、英海軍参謀部に、ノルウェー西岸のナルビック港からドイツに輸送される鉄鉱石についての情報確認を命じる。その命令文の中でチャーチルは、ノルウェーが中立国であることを認識しつつ、その領海内に機雷を敷設することに強い関心があることを述べる。彼は10月初めのタイミングで、機雷敷設案を内閣の会議で提案する。会議はその必要性はある程度認めたものの、外相がそれはやはりノルウェーの中立をイギリスが侵犯することになる、望ましくないのでは……との意見を述べ、また政府の他の部局の消極姿勢もあり、

実施は見送られた⁽²¹⁾。しかしチャーチルは、その後もこの機雷作戦案を主張し続けた。そしてドイツがイギリスの港湾施設に埋め込んだ機雷でイギリス船舶が被害を受けることが現実にも多発し、Uボートの攻撃でイギリスや中立国の輸送船がしずめられることが起こるようになると、内閣の意見もこの案に傾いていった。

ノルウェーのナルビック港は、スウェーデン鉄鉱石のドイツに向けた海上輸送に関して、以前から不可欠とも言えるべき重要な役割を果たしていた。スウェーデンの鉱山は、スカンジナビア半島北部内陸、ラップランド地方のエリバレ Gallivare やキルナ Kiruna などにあるが、これらからの鉄鉱石は、3つの港まで運んでそこから輸送していた。そのうちの2つ、ボスニア Bothnia 湾の奥に位置するルレオ Lulea と、バルト海に面し首都ストックホルムの南にあるオクセレスンド Oxelesund はスウェーデンの港であるが、ナルビックはノルウェーの北西海岸の港である。

ルレオは、冬の間の数カ月は凍結してしまう

ので、夏にしか使えない。オクセレスンドは凍結はしないが、鉱山から長距離鉄道輸送をしなければならないし、施設の能力にも当時限界があった。一方ノルウェーのナルビック港は、メキシコ湾流のおかげで冬にも凍結せず、一年中使用が可能だった。ナルビックならば、鉱山からの鉄道輸送距離は（オクセレスンドよりはるかに）短く、港で輸送船に積んでノルウェーの西海岸沿いに南西方向に航行して北海に入り、ドイツで揚陸する。ナルビックは、ルレオが使えない凍結期（約5か月間）には、ドイツにとって、スウェーデンにとって（ノルウェーにとっても）極めて重要な港だった。そのことをイギリス海軍は承知していた。ノルウェーのナルビック周辺に機雷を設置すれば、あるいはナルビックそのものを押さえてしまえば、ドイツへの鉄鉱石供給を阻むことが出来る。それはドイツの戦争継続能力を大きく減少させることになる。イギリスのチェンバレン内閣は、フィンランドに援軍を送るにあたって、ナルビックとトロンヘイムに上陸させると決定したのだった。



スカンジナビア半島

そして、いざ出航となった日（3月12日）に、フィンランドがソ連の“和平”案をのまされたというニュースが入り、派遣軍が解散したのは既に述べた通りである。

ヒトラーにとってノルウェーが英仏の影響下に入るようなことは、決して受け入れられないことだった。これはデンマークについても同じであった。ヒトラーは（前出のように）39年12月14日にノルウェー攻撃作戦を準備せよと命令を下していたが、ソ連・フィンランド戦争の展開と、英仏政府やその艦船の動きを見て、彼の決意はますます固まっていった。40年1月27日、ヒトラーは国防軍最高司令部（Oberkommando der Wehrmacht OKW）トップのカイテル Keitel 上級大将に、ノルウェー占領作戦準備の促進を命じた。ノルウェーとデンマークを支配下に置く!! 英仏に基地など置かせはしない!! 鉄鉱石輸送を確実にするぞ!!

2.2 ドイツのデンマーク、ノルウェー侵略

ヒトラーはノルウェー・デンマーク作戦（Weser Exercise, Weserübung）を先に決行すべきか、それともオランダ、ベルギー Low Countries 侵攻作戦（Case Yellow, Fall Gelp）を先行させるかを決断しなければならなかったのであるが、3月2日国防軍最高司令部の作戦部長アルフレード・ヨードル Alfred Jodl に、ノルウェー・デンマークを先にやると指令したのだった。このことがヨードルの日記の3月2日付に記されている⁽²²⁾。ヒトラーの準備は加速されていった。

さて英仏が援軍を送る前にフィンランドはソ連に屈服した。この結果、フランスではフィンランド支援に兵力を送らず、言葉だけの応援に終わってしまったグラディエ首相が退陣を余儀なくされ、3月21日レノー Reynaud を首相とする新内閣が発足した。3月28日レノーと彼のチームはロンドンでチェンバレン英政権との

会議（英仏両政府合同最高軍事協議会 Supreme War Council）に入った。ここではドイツへのスウェーデン鉄鉱石輸送を阻むため、ノルウェー領海に機雷を設置すること、及びそれをノルウェー、スウェーデン政府に通告する問題、ドイツへの石油供給の供給先であるルーマニア、バクーに関する問題、ライン川に浮遊機雷を落下させる問題などが話し合われ、とりあえず、ノルウェー領海の機雷敷設実施は合意された。またこの会議において、ドイツ軍が中立を宣言しているオランダ、ベルギーを攻撃し、更にフランスを攻める可能性が高いことも討議され、もしドイツがベルギーに侵入したら、英仏はベルギー政府の要請の有る無しに関わらずベルギー領に兵力を投入すること、もしオランダがドイツに攻撃され、それに対してベルギーがオランダ側に立たない場合にも英仏はベルギー領に兵力を進めることも合意された⁽²³⁾。イギリスは4月8日、ナルビック近海の機雷設置を実行した⁽²⁴⁾。

正にその翌日の4月9日の早朝、ドイツ軍はまず中立国デンマークに突然侵入する。国防力を殆ど欠いているデンマークの国王とその政府は、抵抗出来ず瞬く間に降伏する。ノルウェーに対してドイツは、デンマーク侵入と同じ日に、海上から攻撃を開始する。これも中立を宣言しているノルウェーは驚いて抵抗するが、その抵抗を払いのけて、ドイツの陸戦隊がノルウェーの幾つかの重要拠点に上陸した。ノルウェーの首都オスロ（湾に面している）では、ドイツ艦隊は苦戦するものの、ドイツ空挺団が落下傘降下して首都近郊の航空基地を押さえ、主にここから発進する兵力によってオスロは占領される。スタバングル（Stavanger）、ベルゲン、トロンハイム、ナルビックという戦略的に重要な都市、港湾、航空基地が、わずか二日間のうちにドイツ軍の手におちる⁽²⁵⁾。ノルウェー国王と政府は、辛うじてオスロから脱出

し、ドイツ空軍に追跡されつつも国民に抵抗を呼びかけた。

英仏の最高軍事協議会が急遽ロンドンで開かれ、ドイツのノルウェー侵略に対して反撃を加えること、ノルウェー政府を軍事的に支えることを決定する。ここではフランス側から、オランダとベルギーに対してもドイツが侵入を準備しているのではないかと思わせる差し迫った兆候があることも報告された⁽²⁶⁾。ヨーロッパでの戦争は、急速に温度を上昇させていく。

4月7日、8日、9日の段階で、イギリス海軍の艦隊も、ドイツ海軍の艦隊もノルウェー領海にいた。しかし前者の主力はナルビック近海での機雷敷設に向けて動いている最中であり、後者はノルウェー上陸、攻撃の電撃作戦実施ために動いていたのだった。そしてイギリスの艦隊は、イギリス海軍本部から、敵の艦隊が動いているぞとの情報を受けたものの、ドイツ艦隊の作戦の詳細が分からず、従ってそれを有効に阻止するための行動をとることが出来なかった。イギリスの海軍本部とその艦隊が慌てて侵略阻止に動いた段階では、ドイツ艦船、陸戦隊、空挺団は、既に戦略地点を押さえてしまっていた。しかも空軍の援護を欠いていたイギリス艦隊の行動は、ノルウェーのオスロ、スタバングル、トロンヘイムなどの航空基地を押さえたドイツ空軍によって、大きく阻害されることになった⁽²⁷⁾。また、チャーチルによれば、ドイツは侵入開始の一週間前にナルビック港にむけて積み荷が空（から）であると装った鉱石運搬船を出港させ、この船の中には物資と弾薬がぎっしりと詰まれて隠されており、これをナルビック港に停泊させてドイツ軍陸戦隊上陸後のナルビック占領および占領後に備えていたという⁽²⁸⁾。

既述のように、4月11日までにノルウェーの重要拠点のほぼすべてをドイツ軍に抑えられ

てしまうという事態が起きていた。英仏は、ドイツのスカンジナビア半島に対する侵略を示唆する幾つか切れぎれの情報を直前には得ていたものの、それに対処する準備は行われないうまま、不意をつかれたのである。しかし勿論、英仏は事態を放置するわけにはいかない。4月9日以後、ノルウェー領海での戦いが始まった。

ナルビック付近の海域には、機雷設置（ナルビック港よりも南方海域）のために活動していたイギリスの艦船があり、この艦隊は9日早朝にドイツ海軍の巡洋艦2隻と遭遇する。後者は、ナルビック港に約2000人のドイツ兵を上陸させる作業を終えて湾を出てきたところだった。ここで最初の海戦が行われる。10日にもイギリスの駆逐艦6隻がナルビック湾内に入り、湾内にいたドイツの駆逐艦隊と交戦、イギリス側の指揮官を載せた駆逐艦が沈没し、指揮官が戦死するということが起きた。

海軍力ではフランスにはるかに優るイギリスが、艦隊を次々に出港させた。またイギリス海軍艦船には、まずイギリス陸軍兵力を、そして少々間をおいてフランスの兵力を載せ、ドイツに占領された拠点に向かわせた⁽²⁹⁾。

ノルウェー南部のオスロ、ベルゲン、スタバングルのドイツ軍は、港湾の砲台も押さえ、独空軍Luftwaffeが空から英仏艦隊の接近を阻止すべく戦闘態勢にあった。早くも9日にはベルゲンの湾外でも、ドイツ空軍がイギリス艦船を爆撃、イギリスの爆撃機が反撃してドイツの巡洋艦1艘を沈没させている。

イギリス艦隊と空軍は、ノルウェー南部におけるドイツの防衛体勢が相当程度固まりつつあることを認識し、主要な攻撃の焦点をノルウェー中央海岸都市のトロンヘイムと北部海岸の鉄鉱石搬出港のナルビックに絞っていった。イギリスが（特に海軍大臣のチャーチルが）、ナルビック奪回に対して強いこだわりを持っていたこと及びその理由については既に述べた通

りである。トロンヘイムは、ノルウェーの中部地域にある主要港湾都市であり、それより北方の細長いノルウェー領土は、ノルウェー南部と比較して人口密度も低く、交通網も密ではなかった。それだけに英仏としては、とりあえずトロンヘイムからドイツ軍を追い払って、それ以上北方には独軍を展開させないということを用意したのである。次にここを基地として南方のドイツ軍に対抗していく体勢を取るという考えだった。

ナルビックには空母フューリアス Furious を含むイギリスの増援艦隊が、陸戦隊を乗せて送られ、4月12日には空母から発進した爆撃機が湾内のドイツ艦隊を低空爆撃、13日にはイギリス艦隊が湾内に入り、ドイツ駆逐艦8隻を全て沈めてしまうという戦果をあげた。イギリス艦隊の司令官コーク Lord Cork 海軍大將は、そのまま陸戦隊を上陸させてドイツ軍からナルビック奪取に動こうとしたが、陸戦隊を率いる陸軍のマッケシー Mackesy 少將は、海軍の命令系統ではなく陸軍の命令系統に属しており、陸軍の命令書の文言を楯に敵前上陸を拒んだ。敵が陸上施設を押さえており、上陸作戦は市民を巻き込むことになるという理由だった。彼はナルビックからは北寄りの島に陸戦部隊を上陸させてしまい、コークはこの時点でのナルビック奪取を諦めざるを得なかった。

ナルビックには、既に9日に上陸していたドイツ陸戦隊約2000名と、沈没したドイツ駆逐艦から逃れた独海軍兵3000名が残り、これが港湾と鉄道とを守備することになった。北極海に近いナルビックは4月でも残雪に覆われ、ドイツの占領軍はこの残雪を利用し、またノルウェー人市民を英仏軍に対する防備の楯にした。マッケシー少將は、市民を巻き添えにするナルビック攻撃に反対し続けた。(この時から一ヶ月もたたないうちにイギリス首相となる

チャーチルは、ナルビック上陸作戦敢行の最大の提唱者だった。チャーチルの回想録は、特にマッケシーへの批判、非難に数ページを割いている⁽³⁰⁾。)

もう一つの攻撃対象のトロンヘイムでは、ドイツ軍の防備態勢はナルビックにおける態勢よりも強固になっていた。ここにはバエルネス Vaernes に航空基地があり、これを制圧したドイツ軍は、航空輸送により兵員と兵器を増強させていたのだった。イギリス艦隊は正面突破攻撃を躊躇する。そのかわり、トロンヘイムの北方80マイルに位置するフィヨルドの奥にあるナムソス Namsos という小さな港に、14日以降英仏の部隊が上陸した。続いてトロンヘイムの南方150マイルのフィヨルド奥にあるオンダルスネス Andalsnes というこれも小さな港に、17日以降英仏部隊が上陸する。(ノルウェー海岸は、約1000マイルにわたって、大小無数のフィヨルドが続いている。)ナムソスとオンダルスネスを拠点として、北と南からトロンヘイムに迫り、同時にトロンヘイム正面に対して空母を含む艦隊が攻撃を仕掛ける、つまり三方からの同時攻撃でトロンヘイム攻略という作戦がたてられたのだった。

ナムソス、オンダルスネスには合計で約13,000人の英仏の兵力がほぼ無傷で上陸した。作戦では、更にフランスからのアルペン山岳部隊25,000人を送り込んでトロンヘイム攻撃に参加させる予定だった。

しかし、ナムソス、オンダルスネス双方とも、実際は小さな漁港に過ぎなかった。そこには重火器、大規模部隊を支えるための食糧、燃料、弾薬を効率よく陸揚げする施設はなかった。(トロンヘイムにはそれがある。だからこそ英仏はトロンヘイムが是非とも欲しかったのである。)そして、13,000人の兵力が上陸してほどなく、正面から攻撃予定のイギリス艦隊および陸戦隊

には……特にそれらの上にある海軍参謀部、陸軍参謀部には……、トロンヘイムのドイツ軍防備、特にドイツ空軍の攻撃力を考えると、イギリス側の犠牲が、海上でも陸上でも大きすぎることにしはしないかとの重大な懸念が、早くも4月18日には出てくる⁽³¹⁾。

結局イギリス艦隊によるフィヨルド正面からの攻撃は見送られることとなり、北のナムソスと南のオンドルスネスから、陸上でのトロンヘイムのドイツ軍に対する挟み撃ち作戦 (pincer movement) を行うことになった。とはいえ、イギリスの空軍力の多くはイギリス本土、フランス、地中海方面に配置され、スカンジナビア半島方面への配備はドイツ空軍のそれを比べ、はるかに手薄だった。

挟み撃ち作戦の結果は……失敗に終わった。ナムソスを発った英仏軍は、残雪の中を4月21日、トロンヘイムまで50マイルに近づいた地点でドイツ軍と交戦したが、重火器、輸送機動力を欠き、空軍援護も無い英仏側は、退却せざるを得ず、消耗した部隊はようやくナムソスに戻ってきた。ちなみにチャーチルによれば、ナムソスの英仏軍を率いたカートン・デ・ウィアート Carton de Wiart 少将のところには、英艦隊によるトロンヘイム・フィヨルド正面攻撃中止の情報が伝わっていなかったという⁽³²⁾。4月28日、ナムソス撤退が決定され、5月3日に撤退作業が完了した。しかし撤退軍をのせてフィヨルドから出た艦隊はドイツ空軍の攻撃により、英、仏の駆逐艦1艘ずつが沈められた。

オンドルスネスの部隊を率いるモーガン Morgan 准将は、トロンヘイムに出発する前に、ドイツ軍と戦って敗走するノルウェー軍の要請を受け、トロンヘイムとは反対方向のリレハンメル Lillehammer に向かった。ここでドイツ軍と交戦。フランスから新たに派遣された1個大隊も加わり、英、仏、ノルウェー合同で戦うものの、ここでも重火器、輸送機動力を欠き、

空軍の援護もなく、後退を続け、オンドルスネスに戻る。ここから5月2日に撤退した。

結局、5月初めまでに、トロンヘイム奪回作戦は英仏の完敗、ドイツの大勝利に終わる。ノルウェー領土内に残る英仏兵力は、ナルビック周辺にいるだけとなる。そしてナムソス撤退完了の1週間後の5月10日、ドイツはオランダ、ベルギー侵攻を開始する。ドイツ機甲軍団と空軍とは瞬く間にフランス領内に入り、フランスもイギリスも、極度の危機に陥っていくのである。ドイツと英仏間の戦争の局面は根本的に変化し、その主舞台はスカンジナビアを即座に離れて、西ヨーロッパの中心部に移っていくことになる。

ここでスカンジナビア半島から視線を移す前に、ナルビックでその後起きたことに短く触れておきたい。英仏はトロンヘイム撤退を決断させられたが、ここから撤退するならば尚更、ナルビックを奪取しなければならないという考えが強まった。トロンヘイム撤退以前の段階で開かれた4月22日の英仏最高軍事協議会では、英仏の更なるノルウェー支援の強化が合意されていたが、合意に沿ってフランスのアルペン師団の3個大隊、外人部隊 Foreign Legion 2個大隊、ポーランド兵4個大隊、ノルウェー兵約3500人の陸戦隊が編成された。これを順次ナルビックに送ることにしたのである。ドイツがオランダ、ベルギーに侵入する前の5月初めのタイミングであった。この兵力を率いたのは前出のマッケシー少将ではなく、フランスの指揮官だった⁽³³⁾。これらの部隊を先ず5月12-13日にナルビック周辺のフィヨルドに上陸させた。これ以後ドイツの守備軍(約6000人)との戦いが続いた。結局5月28日までにドイツ軍は東方に敗走する。かくてついにナルビック奪取作戦は成功した。

しかし次節で述べるように、フランスでは5

月13-14日、ドイツの機甲軍団がフランス・ベルギー国境を越えてフランス領内に侵入し、以後英仏海峡を目指して驀進していく。ナルビックでドイツの守備隊が敗走する1日前の5月27日には、フランスでドイツ軍を相手に戦っていたイギリス軍が、ダンケルクから命からがらほとんどの武器を捨てて撤退し始めるのである。多数のフランス兵もダンケルクからイギリスに逃れた⁽³⁴⁾。そのような極端な危機的状況の中で、スカンジナビア半島の北端に近いナルビックに、戦闘力の高い英海軍艦隊と英仏などの歩兵戦力を張り付けておく余裕は、フランスにもイギリスにもなかった。6月8日、英仏+ポーランド兵24,000人は武器弾薬、物資を積み込んでナルビックから撤退する。その撤退の途中で、ドイツの巡洋戦艦艦隊に攻撃されたイギリス空母グロリアス *Glorious* と護衛のイギリス駆逐艦2隻が撃沈される⁽³⁵⁾。

この撤退と同時に、ナルビックよりも更に北方の小島トロムセ *Tromsø* に避難していたノルウェー国王と政府要人は、イギリス海軍の巡洋艦デボンシャー *Devonshire* によってイギリスに亡命した。(国王および彼の政府は、4月9日にオスロをのがれてベルゲンとトロンヘイムの間あたりにあるフィヨルドに面したモルデ *Molde* という市にたどり着き、ここからイギリス巡洋戦艦グラスゴーで4月29日トロムセまで送られたのだった。)

本節を終える前に2つのことを記しておく。ノルウェーにおける戦い後のドイツ海軍艦隊の状況と、イギリス首相がチェンバレンからチャーチルに交替したことである。これら2つとも、以後の世界大戦の展開にとって重要な意味を持つことになる。

Churchill Vol I (参考文献7) の Appendix R は、ノルウェー沿岸での戦いにおいてどれだけの数のドイツ海軍艦船が撃沈ないし破壊された

か、どれだけが破壊されないまでも大きな損害を受けたか、40年6月の段階で戦闘出動可能だった艦船の数はどれだけだったかを記録している。その詳細をここに再録はしないが、6月段階で戦闘出動可能だったのは、U-ボート潜水艦を除けば、8インチ砲巡洋艦1、軽巡洋艦が2、駆逐艦4、魚雷艇19のみとなった。撃沈ないし破壊されたのは8インチ砲巡洋艦1、軽巡洋艦2、駆逐艦10、魚雷艇1、U-ボート8。これに加えて機雷掃海艇3、輸送用船舶11、補助艦4も失われた。

もちろん、イギリス艦隊の損害も決して軽くはなかった。撃沈あるいは破壊されたのは航空母艦1、巡洋艦2、駆逐艦9、潜水艦6、輸送船4など。しかし、もともとの艦隊の規模がイギリスとドイツの海軍では大きな差があった。ドイツ海軍が40年6月段階で出動させることのできた艦隊サイズは、極めて限られたものとなっていた。これではヒトラーが計画したイギリス本土上陸攻撃作戦 *Operation Sea Lion* がスムーズに実行できるわけがなかった。(作戦は結局延期に次ぐ延期となり事実上断念される。第4節)

2.3 チェンバレン首相退陣とチャーチル新首相登場

ノルウェー北端に近いナルビックでは未だ決着はついていなかったものの、ノルウェー南部をドイツに押さえられ、次にトロンヘイム作戦が失敗、撤退=敗北という事態の展開は、イギリス国民に大きな衝撃を与えた。これが、開戦以来イギリスが経験した最初の大きな軍事的敗北だった。当然政府の責任を問う動きが高まった。5月7、8日、イギリス下院において、政府のこれまでの戦争の進め方が良かったのかそれとも悪かったのかについて議論するための議会が開催された。野党の労働党、自由党議員たちは、ヒトラーに対して維持した融和政策から

ここに至るまでのチェンバレン内閣の足跡を取り上げ、そしてトロンヘイム奪取作戦の細部に立ち入って批判していった。政府を批判するのは、野党だけではなかった。身内の保守党議員の中からも、チェンバレン政権の戦争指導についての批判が湧きあがった。

例えばポーツマス・ノース Portsmouth North 選挙区選出議員の現役海軍提督ロジャー・キーズ Sir Roger Keyes は、第一次大戦はもちろん、それ以前から数々の海戦に艦長、艦隊指揮官、海軍司令部での軍役を経験した保守党議員でもあったが、5月7日の下院議会には海軍大将の軍服で登壇し、トロンヘイムで海軍艦隊に正面攻撃を停止させてしまったことを戦略的誤りとして政府を批判した。「私は海軍省や戦時内閣に対して、自分が責任を持つ、私にトロンヘイム攻撃の指揮をとらせよとしつこく言ってきた importune。」

また同じく保守党でバーミンガム・スパークブルック Birmingham, Sparkbrook 選出のレオ・エイムリー Leo Amery 議員は、これもチェンバレン首相達の戦争指導を批判し、その演説を17世紀にクロムウェルが行った演説を引用して締めくくる。つまり、……自分は友人、同志にたいしてこんなことは本当に言いたくないが、クロムウェルが長すぎる議会の審議に対して議員たちに、今や君たちは国家の運営を担うにふさわしくないとして投げつけた言葉が、今の状況に当てはまる。つまり、You have sat too long here for any good you have been doing. Depart, I say, and let us have done with you. In the name of God, go. (何か良きことをなそうとするには、君たちはここに長く居過ぎた。立ち去りたまえ、君たちはもういらぬ。神の名において言う、去りたまえ!⁽³⁶⁾)

……

これらは7日に行われた演説である。次の8日にも議会での議論が続く。そしてその夜遅

く、野党労働党のハーバート・モリソン Herbert Morrison が議会演壇に立ち、チェンバレン首相に挑戦状を叩きつけた。現政権の戦争のやり方について、それを是とするか非とするか、議員投票で決を採ろうではないか。チェンバレンは受けて立ち、投票が行われた。結果は……政府のやり方を是とするもの (Ayes) 281票、非とするもの (Noes) 200票⁽³⁷⁾。チェンバレンが一応数の上では勝った。しかし深刻な問題は、与党から41人が野党に同調して非に回り、更に30人が是非を明らかにするのを避けて棄権に回ったことであつた⁽³⁸⁾。投票は実質的に、チェンバレンに対する信任投票の性格を持ったものになった。政権維持を考えて、チェンバレンは野党(労働党と自由党)に挙国一致内閣編成を打診する。労働党はこれを拒否。

9日チェンバレンは外務大臣のハリファックス Halifax 卿と海軍大臣チャーチルを官邸に呼び辞任の意を伝え、どちらかが後任を引き受けるよう示唆する。“信任投票”でチェンバレン政権の土台が大きく揺らいだとはいえ、保守党は下院において圧倒的過半数を占めていたことに変わりはない。保守党が次期政権を編成する事には疑問の余地はなかったのである。(保守党の議席数は、他の全ての党の議席を併せたよりも120以上多かった⁽³⁹⁾。)

ハリファックス卿は、自分は貴族院議員であつて下院議員ではない、下院議員でないものがこのような戦争の最中に、政権を担うのは難しいのではないかと応えた。チャーチルの方は沈黙を守り、つまり断らなかった⁽⁴⁰⁾。このようにしてノルウェー作戦指揮を実質的に取り仕切ってきたチャーチルが5月10日、首相の座に着いた。そして正にその日5月10日、ヒトラーの軍隊はオランダとベルギーに侵入するのである。

3. ドイツ軍のオランダ、ベルギー、ルクセンブルグ侵略、フランスでの戦いとその結果

3.1 主に戦争直前の状況について

5月10日以後5週間ほどで、西ヨーロッパの軍事情勢は急激に、根底から変化してしまうことになる。まぎれもなく世界的強国の一つだったフランスの西ヨーロッパにおける軍事的プレゼンスは、この短い期間にほぼ崩壊し、西ヨーロッパ大陸および中欧、東欧において、ヒトラーのドイツに対抗する国は一つも無くなる。ドイツの占領または支配下にある国、あるいはドイツに対して極めて慎重に気配りしつつ、何とか中立を守る国、あるいはヒトラーの盟友ムッソリーニのファシストイタリアのような国ばかりになった。

ドーバー海峡を隔てた島国のイギリスのみが、世界の強国として唯一ナチスドイツと軍事的に対峙することになった。チャーチルの回想録『第二次世界大戦』第2巻第2部のタイトルは、この時イギリスが置かれた状況を極めて印象的に一語で表現する。ALONE。自分たちは完全に孤立した！ 独りで戦わなければならない！ 本節と次の節では、イギリスがヨーロッパにおいてほぼ完全に孤立してしまうまでの展開を述べていく。

5月10日ドイツに突然侵入されたオランダ、ベルギー両国は、侵入されるまで中立を宣言していたのであった。ドイツ、英仏どちらにも加担しない、戦争の局外に立つと。オランダは、第一次世界大戦でも中立を守り、大戦後もその路線を堅持していた。ベルギーは第一次大戦勃発まで永世中立の立場をとっていたが、ドイツがそれを無視して侵入し、戦場となって戦災に遭い、この経験の後1920年にフランスとの軍事同盟を結ぶ。しかし、ヒトラードイツが再軍

備し、ラインラントに進駐するのをイギリスもフランスも阻止しなかった、あるいは阻止できなかったという現実を見て、ベルギーは1936年フランスとの同盟を解消し、第一次大戦以前の中立路線への復帰を決めたのだった⁽⁴¹⁾。

30年代が終わりに近づき、ドイツ対英仏の軍事的緊張が高まるとともに、英仏はオランダ、ベルギーに軍事的対話と協調を働きかけるようになる。39年9月の開戦以降はその動きが強まった。しかしオランダ、ベルギーは、その働きかけに応えようとしなかった。ベルギー、オランダ両国とも、ドイツが、そして英仏も、自国の中立の立場を尊重してくれることに懸ける形となったのである。

とはいえ両国とも、戦争の危機が近づいているという認識を強く持っていた。オランダは万一ドイツが侵略してきた場合に堤防を開いて洪水を起こし、Grebbe LineやPeel Lineその他などを防御線とする準備を加速させた。ベルギーも国内のムーズ（Meuse）川＋マース（Maas）川＋アルバール（Albert）運河に沿った防衛線、およびディール（Dyle）川沿いの防衛線設置を急いだ。アルバール運河沿いには枢要地点に幾つもの要塞が築かれ、そのうち最大のエーベン・エマエル（Eben Emael）要塞は、ドイツに破られることは無いものと想定されていた。更に、中立国同士のオランダ、ベルギー両国は、防衛協力のための話し合いを行う。40年前半の段階では、両国合わせて約90万人の兵力が招集されていた⁽⁴²⁾。

英仏両国は、自分たちとの協力を受け入れようとしないオランダ、ベルギーに対し、深い懸念と不満を持っていた。自分たちと協力すれば、彼らの防衛線はもっと強化されるのに……、そしてそのことは彼らの国土をドイツの攻撃に対してより強固にし、フランスをもより安全にするのに……、それなのに彼らは……。不満や懸念はありつつも、国防に関して英仏と

の協力を拒むオランダ、ベルギーに対し、英仏は両国の中立を侵して侵入するわけにはいかなかった。(しかしさすがにベルギーは、39年9月以降、極めて秘密のうちにフランス軍最高司令官ガムラン (Gamelin) 陸軍上級大将との戦略対話に、ある程度応じるようになった⁽⁴³⁾。

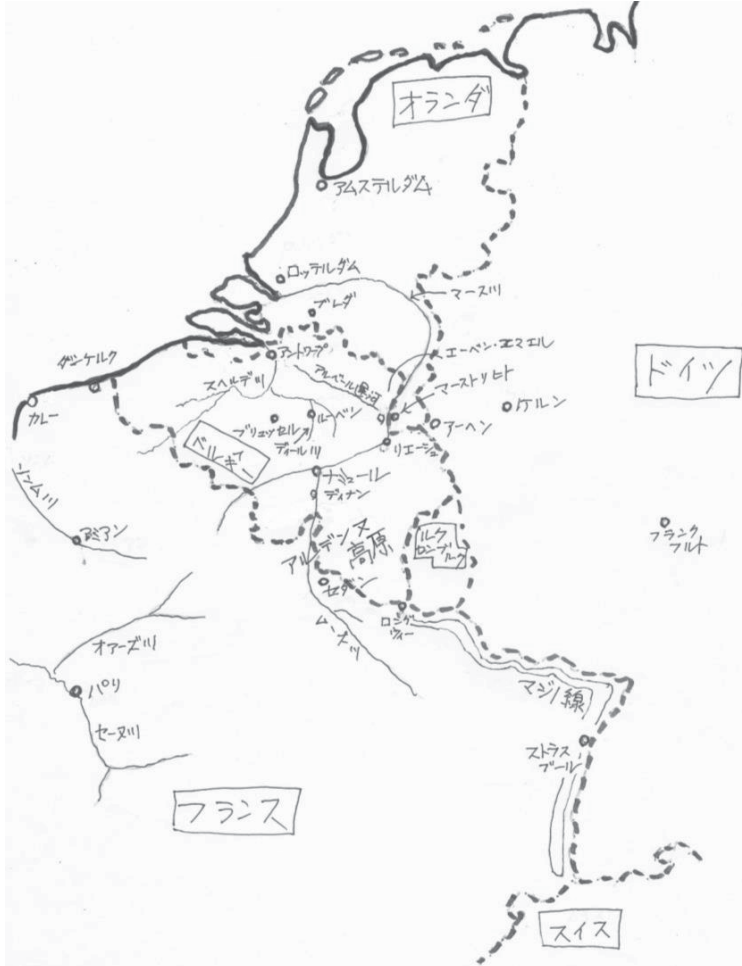
40年5月時点までには、フランスと英国の連合軍が、ベルギー・フランス国境にそって、つまりドーバー海峡に面するダンケルク (Dunkerque, Dunkirk) から東方内陸のセダン (Sedan) 周辺まで長く配置された。そしてセダンから更に東方には、これこそ鉄壁を誇るマジノ (Maginot) 線があり、マジノ線では適所に極めて堅牢な要塞、コンクリート、鉄、鉄条網、そして地下には一部鉄道まで配備した防衛線がスイスとの国境まで延びていた。英仏連合軍は、第一次大戦後にフランスが巨費を投じて築いたマジノ線は、鉄壁であると想定していた。またマジノ線の西端から見て西側には、アルデンヌ高原がルクセンブルグ、ベルギー南東部、フランスにまたがって広がっているが、この地域は森が広がり、地形的にドイツの機動部隊がここを突破してくるのは困難であり、もし突破しようとしてもかなりの時間がかかるであろうと判断されていた。従って、攻めてくる可能性は低いが、万一ドイツがこの方面から攻めてきたとしても、時間的余裕をもって対処できるであろうということだった。特にフランスの軍部にはこの考えが強かった。

このように、英仏連合は40年5月まで、オランダ、ベルギーとの表立った連携作戦を取ることが出来なかった。しかし、ヒトラーの軍隊がオランダ、ベルギーを侵略してきた場合には、どのように対処するかということについては、英仏軍の間で39年9月の開戦時点で作戦が……完全にではないものの……ほぼ出来上がっていた。その基本は、仏英連合軍は国境を越え

てベルギー領に進出し、ベルギー軍が侵入してきたドイツ軍と戦うのを支援するということがあり、フランスの最高司令官ガムランが提唱した作戦だった。その後11月までに、この作戦はガムラン主導で練り上げられていった。これがプランDと称される作戦である。

プランDでは、フランス-ベルギー国境に配置された仏英連合軍は、ドイツのベルギー、オランダ侵入に即座に反応して、国境を越えてベルギー領に入り、ムーズ川、ナムュール Namur、ルーヴェン Louvain (または Leuven)、アントワープ Antwerp の線まで前進し、ドイツの侵入軍と前面で戦うベルギー軍を支援することとなっていた。また、仏英軍前線の最も西側、ドーバー海峡に最も近いところに位置する部隊は、大きく北上してオランダ領に入り、スヘルデ (Shelde) 川の河口を押さえ、ブレダ Breda まで進出し、オランダ軍と共にドイツ軍と戦う⁽⁴⁴⁾。これがいわゆる西部戦線における英仏連合の基本戦略だった。(とはいえ少し後で触れるように、イギリスの参謀本部にはこのプランDに対する相当な懸念があった。)

ここで、ナチスドイツ軍がオランダ、ベルギー、ルクセンブルグ (そしてフランス) 侵入直前、西部戦線においてどのように軍を配置したかを見ておきたい。ドイツ軍は、兵力を3つに分け、オランダ-ドイツ国境沿いでは北方からアーヘン Aachen まで軍集団 Army Group B に28個師団を配する。司令官はフォン・ボック von Bock。アーヘンからモーゼル Mosel 川までは軍集団Aに最大の兵力となる44個師団を配し、司令官はフォン・ルンドシュテット (von Rundstedt)。モーゼル川からスイス国境までは軍集団Cに17個師団を配し司令官フォン・リープ von Leeb。これらに加え、ドイツの陸軍総司令部 OKH (Oberkommando der Heer) は20個師団をこれらA, B, C軍集団



フランス、ベルギー、オランダ、ドイツ

のうしろに予備軍として控えさせ、さらに27個師団を総司令部直属の一般予備軍として用意した。つまりドイツ陸軍は、西部戦線における戦闘のために、全部で $28+44+17+20+27=136$ 個師団を配備したのである。そのうちの10個師団は戦車師団 panzer divisions であり、戦車総数は3000弱、そのうち1000台は重量戦車だった⁽⁴⁵⁾。ドイツが陸軍兵力全体155個師団のうち136個師団をこの戦線のために用意できたのは、ポーランド作戦が決着し、スカンジナビア作戦もほぼ見通しが付き、そして何よりもソ連との不可侵条約があり東方への兵力配置を

大きく削減できたからであった。この条約が無かったならばソ連に備えて非常に大きな戦力を東欧に配置しておかなければならなかっただろう。この必要が無くなったのである。

またドイツは、空軍力の大きな部分をこの西部戦線に投入する。戦闘機、爆撃機の具体的な飛行中隊 (squadron) 数や航空機数の詳細は筆者には不明であるが、チャーチルは、ドイツの戦闘機が数においても、性能においてもフランス空軍よりはるかに優れており…the German fighter aircraft now concentrated in the West were far superior to the French in

numbers and quality…と述べ、イギリスはフランスにハリケーン戦闘機を10 squadron (飛行中隊)、爆撃機、偵察機あわせて19 squadrons を送っていたとしている⁽⁴⁶⁾。ドイツ空軍は、オランダ、ベルギー、フランスにおいて、極めて重要な役割を担ったのであった。(この時点から約3か月後のバトル・オブ・ブリテンに際してドイツ空軍は、2550機の戦闘機、爆撃機などを用意したのであった。迎え撃つ英国空軍の戦闘機は749機しかなかった⁽⁴⁷⁾。

ドイツの陸軍兵力に対し、仏英連合軍はどれだけの陸軍兵力だったのだろうか。これもチャーチルによると⁽⁴⁸⁾、フランス第1軍集団 Army Group は海岸のダンケルク～フランス・ベルギー国境線～ロンウィ Longwy (ルクセンブルクとの国境にあるフランスの市)に至る線をカバーし、ここに51個師団(これにはイギリス軍の9個師団が含まれる)。第2軍集団はロンウィ～ストラスブールの南まで、第3軍集団はストラスブールの南～スイス国境までをカバーし、第2と第3を併せて43個師団。そしてマジノ線にはほぼ9個師団分の兵力。つまり $51+43+9=103$ 個師団である。ドイツがベルギー、オランダ、ルクセンブルグに侵入した時点で、ベルギー軍22個師団、オランダ軍10個師団が仏英連合軍と急遽“連携”することになるのであるが、結局ドイツに対抗する兵力は、 $103+22+10=135$ 個師団となり、ドイツの136個師団に比べて数の上だけでは対等となった。

ここで一つのエピソードに触れておく。チャーチルの第二次世界大戦回想録第1巻 p501-2 や、A. J. P. Taylor の“The Second World War” p50 (参考文献22)に記録されているエピソードである。西部戦線での攻撃開始4か月前の40年1月10日、ドイツ空軍司令部は参謀の少佐に命じて、ケルンの第7航空師団

本部に、来るべき対オランダ、ベルギー、フランス作戦の内容を記した書類を届けさせることにした。しかしこの少佐は、列車に乗りおくれ空軍機でケルンに向かったところ、航路を間違えてベルギー領に入ってしまう、強制着陸させられた。彼は絶対機密の書類を破壊することが出来ずにベルギー側に取り上げられてしまう。ドイツには、第一次大戦以前から、フランスを攻める場合を想定してシュリーフェン・プラン Schlieffen Plan というものがあつた。ベルギーを通して北側からフランスを攻撃することを基本とする戦略である。もちろん、時代と共に Plan の細部は変更されていったが、基本は同じであつた。今回ベルギー側に渡ってしまった極秘文書も、基本のところはシュリーフェン・プランに沿つたものだった。これを入手したベルギーは、さすがにオランダ、フランスにそれを知らせたが、……チャーチルによれば……ベルギーも、オランダも、フランスも、これはヒトラーの仕組んだ何かのおとりではないかと考えたという。いずれにせよ、この極秘文書が40年1月10日にベルギーに渡つてしまう2か月弱ほど前の39年11月17日の段階で、フランス軍の最高司令官ガムランのプラン D は仏英両政府が了承して正式のものとなつており、ドイツ軍のベルギー、オランダ侵入⇒英仏軍は国境を越えてベルギー、オランダに進みドイツと戦うことが決まっていた。新たな情報が入つたからといって、英仏側は自分たちの作戦を変える必要はなかつた。英仏側としては、プラン D の線に沿つて動くだけである。

一方、ドイツ側はこの重大機密の漏洩に慌てたという。報告を受けたヒトラーは、陸軍トップのフランツ・ハルダー上級大将を呼び、怒鳴りつけた後で、新たな作戦策定を命令した。ヒトラーはもともとシュリーフェン・プランに基づく攻撃作戦には熱意を持てなかつたという。あまりにありふれたアイデアに基づく作戦と

感じたのだという。シュリーフェン・プランを基本とする作戦が決まる以前（従ってもちろん機密漏洩以前）の高級参謀たちとの会議で、ヒトラーは地図を広げて“君たちの作戦でやるのではなく、ここを通れないのか”とアルデンヌ高原を指さしたという。高級参謀たちは、“それは仏英軍主力が大挙してベルギーに進撃してくることが判っているのでなければ（つまりアルデンヌ高原付近の仏英連合軍による守備がよほど手薄になっているのでなければ）、危険すぎます”と説明した。この時はヒトラーが渋々折れて、シュリーフェンを基本とする作戦計画が決まったのだ⁽⁴⁹⁾。（ヨーロッパ軍事史専門家として名高いリデル-ハート Liddell Hart も、シュリーフェン・プランに対するヒトラーの熱意の無さを指摘している⁽⁵⁰⁾。）言うまでもなく、シュリーフェン・プランがそのまま実行されていたならば、ドイツ軍と仏英連合+オランダ+ベルギー軍は、同じ戦場に主力を投入して戦っていたであろう。実際はそうはならなかった。大兵力で“ここ”を守るという仏英の作戦と、“そこ”に主力を注いで攻めるぞというドイツの作戦では、「ここ」と「そこ」が異なり、別々の方角に向かって行ったのである。

ヒトラーのアイデア、つまりアルデンヌ高原を突破してフランスに攻め込むという考えを追求し、これを新たな基本戦略とすることをドイツ陸軍最上層部に提案した人物がいた。ドイツ陸軍中将エーリッヒ・フォン・マンシュタイン Erich von Manstein である。彼の提案は、ヒトラーには直ぐには届かなかった。マンシュタインはこれを提案することで、陸軍最上層部の不興を買い、ドイツ東部に移動を命じられる。彼はこの左遷に伴う移動の途中でベルリンに寄り、ヒトラーに面会し、シュリーフェン・プランとは根本的に異なる自分のアルデンヌ突破戦略を述べたのである。ヒトラーは作戦機密漏洩後に、ハルダーに対して新たな作戦を策定せよ

と命じたばかりだった。ヒトラーはマンシュタインの戦略案を聞いて興奮し、これで行こうと決意する。ハルダー、マインスタイン、陸軍参謀本部は、アルデンヌ突破作戦を詰めて行くことになった。その結果、上述の軍集団 A, B, C が設定され、配置されたのである⁽⁵¹⁾。

B は機甲師団 3 個を割り当てられ、空軍と共にオランダ、ベルギー北方を電撃的に攻撃し、仏英連合軍をベルギー、オランダまで深くおびき寄せる。戦略の中枢を担い最大兵力を割り当てられた A は、機甲師団 7 個を割り当てられ、これも急降下爆撃機を含む強力な空軍と共にアルデンヌ高原を突破する。（既に述べたように、この方面をドイツの主力が襲ってくることは、ガムランのプラン D の想定外であった。）そして軍集団 C は、マジノ線の反対側のドイツ領のザール地方からスイス国境まで展開してフランス軍をできるだけこちらにも引き付けておく。

繰り返しになるが、ガムランのプラン D は、アルデンヌ高原を突破してドイツが強力に攻めてくることを想定していなかった。この地域は地形からしてドイツは攻めてこないだろう、万一この方面を攻撃してきた場合には、それに対応する戦力を移動させるに十分な時間があるはずだ、大丈夫!! とガムランたちは判断したのである。ガムラン連合軍最高司令官は、アルデンヌ地方には仏英連合の第 1 集団軍の中でもっとも弱体とされる第 9 軍を割り当てたのであった。

フランス軍にも数の上から見ればドイツ軍の戦車（2700 台）と対等なくらいの戦車台数（約 3000 台）があった⁽⁵²⁾。しかし多くは（ドイツと異なり）軽量戦車であり、しかもダンケルク付近の海岸からマジノ線に至る長い前線に、（集中してではなく）薄く配備されていたという。



ドイツ軍、仏英連合軍の配置

3.2 ベルギー、オランダ、フランスにおける戦い：バトル・オブ・フランス

そして5月10日になった。ベルギーもオランダも仏英も、ドイツの攻撃が近いのでは……と予期していたものの、それが5月10日になるとは察知していなかった。まずドイツの軍集団Bが動いた。Bはオランダ、ベルギーに空軍を送り、パラシュート降下部隊が航空基地や、堤防要所、要塞、自軍の戦力が渡る主要な橋などを襲い、たちまちこれを占領する。ベルギーの誇るエーベン・エマール要塞は、降下したドイツ空挺部隊が、要塞の屋根の上の通気口から、あるいは窓枠を破壊して爆薬を投下、内部の要塞本部を破壊したのだという⁽⁵³⁾。難攻不落どころか、あっという間に要塞はおちた。

アルベール運河の他の要塞や橋も占領された。オランダにおいても、ベルギーにおいても、それぞれの国防軍は退却を余儀なくされる。5月13日、オランダ女王は政府と海軍艦船とともに、ロンドンに亡命する。14日にロッテルダムが降伏し、またドイツ空軍の誤爆によって市の中心部が爆撃され、破壊されてしまう。15日、オランダ軍は降伏。フランス第7軍は、支援のためオランダ領内に到達していたが、オランダ軍と共闘するチャンスはなかった。

ベルギー軍はすぐには崩れなかったが、やはりマース川やアルベール運河の線から押しまわれ、13日までにはアントワープ、ディール川の防衛線に退却していた。ベルギー軍はアントワープからルーヴェンに展開し、その北西よ

りにはフランス第7軍がスヘルデ川河口周辺に、ベルギー軍の南側に英国の派遣軍（British Expeditionary Force）が位置し、さらにその南側にフランス第1軍がナミュールまでの守備に就いた。さらに南を見れば、フランス軍中でも比較的弱体とみなされた第9軍⁽⁵⁴⁾がナミュール、ディナン Dinant からセダン Sedan 付近までの線に沿うようにベルギー領内に入っていた。

このように、仏英軍主力がこぞってベルギー領深く展開したのであった。しかし、既に何度か触れたように、これら仏英軍主力のほとんどが対峙していたのは、ドイツの軍集団Bであった。Bの主要な任務は、まさに仏英主力をベルギーに引き付け、できるだけ長く引き付け続けることだった。ドイツ軍の主力軍集団Aは、その間にアルデンス高原を突破していくのである。これに立ち向かうのはフランス第9軍9個師団と第2軍7個師団の一部。

A. J. P. テイラーによれば、フランス軍参謀本部のみならずドイツ軍参謀本部も、戦車軍がアルデンス高原を通してムーズ川に到達するには9日間を要すると計算していた。しかし、戦車軍団を率いるハインツ・ゲーデリアン Heinz Guderian は、自分なら4日間で到達して見せると豪語し、実際にはそれより更に短く2日間でムーズ川に到達したのだった⁽⁵⁵⁾。最初のドイツ兵がムーズ川を渡ったのが5月13日。14日には戦車が渡河し始め、この方面を守っていたフランス第9軍は、ドイツの戦車、急降下爆撃機と重火器の前に、たちまち蹴散らされていく。15日にはドイツの戦車軍団がフランス領内を驀進し始めるのである。ゲーデリアンは、そんなに急ぐなという上官たちの命令を無視し、フランス北部を西方に向かって突進する。主力がベルギー領内で（ドイツの軍集団Bに対して）戦っている仏英連合軍にとって、そこでの戦線を即座に離れフランス領内に戻るのは

困難だった。不用意に退却すれば、自軍への被害は甚大になる。そうしている間に、ゲーデリアンたちが率いる戦車軍団の……当時の常識を超えるスピードの……前進を効果的に阻もうとする仏英の部隊は少なく、あったにしてもドイツの戦車軍団と空軍の急降下爆撃機（仏英連合軍にはこれはなかった）の前になすすべのない状態に陥った。この快進撃を前に早くも15日、フランス首相レノーはロンドンのチャーチルに緊急電話する。「我々は破れた。この戦場で負けた。We are beaten. We have lost the battle.」

これほど急速にドイツ軍がフランス北部に大兵力を展開するようになるとは、仏、英は勿論、ドイツ自身にとってすら予想外だったろう。16日、チャーチルは急遽パリに飛び、レノー首相やガムラン仏軍最高司令官たちとの会議に入る。そのとき既にフランス外務省では書類の焼却が始まっており、その煙をガラス窓越しに見たチャーチルは、フランス政府は既にパリを明け渡す準備をしているのではないかと心底衝撃を受ける⁽⁵⁶⁾。ドイツがベルギー、オランダに攻め込んで、わずか6日しか経ってないじゃないか。「それで、あなた方の戦略予備軍はいまどこにいるのか」と問い詰めるチャーチルに対し、ガムランは「Aucune, 戦略予備軍兵力はありません」と応える⁽⁵⁷⁾。「それで將軍、進撃するドイツ軍をあなたはいつ攻撃するのか？」と追い打ちをかけるチャーチルに対し、ガムランは、「数でも敵に劣り、装備も敵に劣り、戦法も敵に劣り……」と応えて肩をすくめたのだった⁽⁵⁸⁾。チャーチルは、フランス-ベルギーの国境約500マイル（約800キロ）を守ろうというフランス軍最高司令官が、このような緊急事態に対処するための戦略予備軍を用意していなかったという事実を、自分の人生で遭遇した最大の驚きの一つと記録している⁽⁵⁹⁾。



ドイツ軍の進撃

実は39年9月18日段階で、イギリスの統合参謀本部 British Chiefs of Staff は、プランDには相当な疑念を持っていた。ベルギー軍、オランダ軍が両国内でドイツの攻撃をしっかりと防いでいるという状況でなければ、仏英軍が両国内に深く入って戦うというフランスの戦略は健全ではない *unsound* と判断していた。ベルギーとの国境に留まるべきではないかと⁽⁶⁰⁾。とはいえ、フランス陸軍はヨーロッパにおいて赫々たる名声を誇る存在であり、しかもフランスは200万人以上を投入しようとしていて、イギリスの派遣軍の兵数の約10倍とはるかに多く、フランスの主導権にチャレンジすることは困難だった⁽⁶¹⁾。チャーチルは、イギリスの統合参謀本部の懸念通りのことが起こってしまったのではないかとこの恐怖と怒りをたぎらせたのだった。

3.3 英仏軍の敗北、ダンケルクからの脱出、 独仏和平（フランス事実上の降伏）

戦車軍団を先頭にして、ドイツ軍集団Aの快進撃が続き、17日になるとガムランは17、18日のパリの安全は保証できても、それ以後は何とも言えないと言い始める⁽⁶²⁾。ドイツ戦車軍団の先頭は、18日アミアン Amiens（ノートルダム寺院がある）の近くまで突進する。海岸にもパリにも近づいたということである。これは北方の仏英連合軍主力（&ベルギー軍）とフランス中部および南部の軍との間に、ドイツ軍が割り込むという形になり、あたかもフランス軍が二つに引き裂かれかねないという状況が出現しつつあることを意味した。19日午前中、ガムラン総司令官はベルギーに展開していた仏第1軍、イギリスの派遣軍、および仏第7軍に対し、戦いつつソンム Somme 川までの後退を命じる。またエヌ（Aisne）川南方にあった仏第2軍、第6軍に対し、彼らの北側を西に向かって進撃中のドイツのA軍集団を攻撃せよ

と命令する。これとソンム川に後退する軍によって、ドイツのAを挟み撃ちしようとしたのだった⁽⁶³⁾。しかしドイツ軍は挟み撃ちされるどころか、向かってくる連合軍を殆どの戦場で叩いていった。ドイツの勢いは止まらなかった。フランス全体にとって（従って海峡を隔てたイギリスにとっても）、状況は刻々と深刻さを増していった。

19日レノー仏首相の内閣は、ついに軍の総司令官ガムランを解任し、後任にシリアから呼び寄せたヴェガン Weygand を就任させる。そして政権内に第一次大戦の英雄の一人であるフィリップ・ペタン Petain 元帥を政権内 No. 2 として迎えたのであった。ペタン 84 歳、ヴェガン 73 歳⁽⁶⁴⁾。戦闘が始まって9日しか経っていなかった。

19日時点で、イギリスからの派遣軍司令官ゴート元帥 Field Marshall Gort は、イギリスの軍本部に対し、ダンケルク付近に退却を検討中と連絡してくる。ゴートの軍の物資、弾薬の供給はかなり不安な状況だった。陸軍参謀長のアイアンサイド Ironside はこの時点ではダンケルク退却を認めず、ソンム川への退却を命じ、自身も急遽ゴートの司令部に飛ぶ。しかしフランス第1軍集団の混乱した状況をアイアンサイド自身が再認識することになった。イギリスでは、ダンケルク付近から脱出しなければならぬ状況を想定して、軍の船舶、オランダ海軍船舶の派遣準備、その他フリー型客船、小型船などの派遣可能な船舶リスト作成が急遽開始された⁽⁶⁵⁾。

チャーチルは5月22日パリに飛び、フランスの政府、軍首脳と会談し、フランス第1軍、イギリスからの派遣軍 BEF は南東方向に向けてドイツ軍に攻勢をかけること、南側からも新たに編成された軍がドイツ軍を突くことなど、ガムランが19日に最後に出した命令とほぼ同様の作戦が確認された。しかし、このヴェガン

の作戦も、局面の転換にならず、戦況は増々仏英連合軍側に不利になって行った。25日までには、ゴートも、ロンドンの英軍本部も、チャーチルも、ダンケルクからイギリスへ脱出する以外に無いと判断するに至った⁽⁶⁶⁾。

24日、ドイツの機甲軍団は、戦史上謎とされるような動きを見せる。突然進撃を停止したのである。何故停止したのかは、後々までさまざまな憶測を呼ぶことになる。この時点で機甲軍団が進撃を停止したことは、脱出を決意したゴートのイギリス軍にとって天佑とも言うべきチャンスをもたらした。戦車軍団が暫しの間でも停止することで、脱出地点として選んだダンケルクへの撤退、つまり果たしてそれが可能か否か大いに危ぶまれた撤退作戦が、可能となったのである。何故ドイツ機甲軍団は停止したのだろうか？ ヒトラーは何故停止を命じたのか？ 幾つかの説がある。

ここではチャーチルの説明を紹介する。チャーチルは、戦後に入手したドイツの機密文書によれば……として次のように言う。ヒトラーは快進撃する軍集団 A の司令部を訪れ、司令官ルンドシュテットと会談する。そのときルンドシュテットは、指揮下の戦車軍団は、2週間にわたって不眠不休に近い状態で進撃を続けた結果、消耗が激しい。そこでしばらくの間、東側では歩兵中心に戦い、西側では装甲車などの部隊も投入して前線を維持し、戦車軍団には暫し休息と補給を与えるべき、そして次なる大攻勢に備えるべき……とヒトラーに進言したのだという。ヒトラーはそれを強く支持した。（チャーチルはこの謎に関して、幾つかの説を紹介した上で、ルンドシュテットの進言説を選択している。）⁽⁶⁷⁾ いずれにせよドイツ陸軍本部は、ルンドシュテットに対して進撃継続の命令を発するものの、ルンドシュテットはヒトラーの支持を楯にこれを拒んだという。

ゴートのイギリス派遣軍は、フランス第1軍の一部と共にダンケルクの周囲に防衛線(Dunkirk Perimeter ダンケルク・ペリミーターという)を敷くことに成功し、ダンケルクの北東方向で崩れそうになりながらもドイツ軍と戦い続けているベルギー軍にも助けられて、ペリミーターの内側に入ることに成功し、5月26日にチャーチルが“ダイナモ作戦 Operation Dynamo”を発令して以降、救助のための派遣される英海軍駆逐艦、巡洋艦、オランダ海軍船舶などに次々に乗船することになる。その際ダンケルクの乗下船施設から乗船するだけではなく、砂浜から(イギリスからやってきた)漁船や、レジャー用ボート、輸送小型船舶に乗り、沖合で待つ駆逐艦や巡洋艦に乗り込んだ兵員も非常に多かった(約3分の1)。5月30日までにはイギリス派遣軍 BEF のほとんどと、フランス第1軍の約半数がペリミーターの中に入ることに成功した。もちろん彼らは、ペリミーターの中に入りつつ防衛線死守の任務も担ったのである。仏第1軍の残りは、ペリミーターには入らず、後衛を引き受けてドイツ軍との戦いを続けた。(そしてその多くが5月31日までにドイツ軍の捕虜になっていった⁽⁶⁸⁾。)

ドイツ側は、このダンケルク脱出作戦に対して、主に空軍が攻撃を加える。しかしイギリスから飛来した戦闘機がこれに応戦し、英巡洋艦、駆逐艦も対空砲で応戦、またドイツの爆撃機が落とす爆弾は砂浜で炸裂したが、砂に衝撃が吸収されて、破壊力を発揮できなかった⁽⁶⁹⁾。そしてペリミーターの外側でドイツ軍と戦い続けた仏第1軍の兵たちやベルギー軍(ベルギー軍は28日降伏するまで戦い続けた)にも助けられ、ダンケルクからの脱出作戦が実行されていく。ダンケルクからの脱出のための“ダイナモ作戦”は5月26日に開始され6月4日に終了が宣言される。この9日間にイギリス兵約19万8000人、フランス兵(および少数の)ベ

ルギー兵約14万人、合計33万8226人の兵士が救出され、イギリスに脱出したのだった⁽⁷⁰⁾。

Dunkirk Evacuation Britannica

確かに、ダンケルク脱出作戦はドイツ軍の予想外の急進撃、仏英軍の全く予想外の急激かつ大規模な退却、後退の結果不可避となったものであった。それだけに、イギリス軍は武器の大半をダンケルクに残してしまったのであった。再びチャーチル⁽⁷¹⁾によれば、

弾薬	約7000トン、
ライフル	約9万
砲(大砲、高射砲など)	約2,300
車両	約8万2000
ブレンガン(軽機関銃)	約8,000
対戦車ライフル	約400

をダンケルクの市街、港、砂浜、その他フランスの地に残してこなければならなかった。しかし、フランス第1軍集団の一部として戦っていたイギリスの派遣軍の大多数を救出することが出来たことは、奇跡にも近い大成果だった。それまで事態の展開を固唾をのんで見つめていたイギリス市民たちは、この成果に深く感動した。しかし同時に彼らは、手放しで熱狂するにはフランス情勢が余りに深刻であり、フランスの敗北もありうることを、そしてそうなった場合、ドイツ軍のイギリス攻撃、イギリス上陸作戦、イギリス本土が戦場になるだろうことを予感していた。脱出作戦の大成功は、政治指導者たちや軍事指導者たちにももちろん大きな高揚感を与えた。しかしもう一方で指導者たちは、ドイツの直接の攻撃の可能性に対し、国の総力を挙げて立ち向かう覚悟を固めること、国民にもその覚悟を固めてもらうこと、そしてその攻撃に対する具体的な備えを急ぐことを改めて迫られたのだった。どんなことがあろうと戦う、戦い続けるのだ!

“ダイナモ作戦”完了を報告する下院議会で

首相チャーチルが6月4日におこなった演説を見てみよう。チャーチルは、ダイナモ作戦がイギリスの陸、海、空軍が総力を挙げて戦った結果として、予想をはるかに超える成功を成し遂げたことを述べた。（……こう述べるにあたってチャーチルは、脱出生還したイギリス兵士の中にあつた少々深刻な誤解に触れ、その誤解を解く説明をしている。その誤解とは、脱出してきた兵士たちが、イギリス空軍は何もしなかったと感じ、そのように主張したことである。イギリス空軍対ドイツ空軍の死闘は、ダンケルクの波止場や砂浜に集結していた兵士たちからは見えない空間で繰り広げられたものであり、それゆえ生死の境にあつた彼らは、英空軍に対し、一体アイツらは何をしていたんだという不信感を抱いたのである。英空軍の活躍なしにはダイナモ作戦の成功はあり得なかった。チャーチルは、陸海空3軍の緊密な連携こそがこの奇跡的な成功をもたらしたことを人々に納得させようとしたのだ。……）その上で、彼は政府の決意を述べていくが、最後の部分は特に後々まで名演説として記憶されるようになる。…we shall defend our island, whatever the cost may be. We shall fight on the beaches, we shall fight on the landing grounds, we shall fight in the fields, we shall fight in the streets, we shall fight in the hills, we shall never surrender. …「……いかなる犠牲を払おうとも、我々は戦う、この国土を守るために。海岸で戦い、敵が上陸しようとする地点で戦い、平原で戦い、街中で戦い、丘の上で戦う。我々は決して降参などしない。」そして最後の最後に、アメリカへの切羽詰まった期待を付け加える。…and even if, which I do not for a moment believe, this island or a large part of it were subjected and starving, then our Empire beyond the seas, armed and guarded by the British Fleet, would carry on the

struggle, until, in God's good time, the New World, with all its power and might, steps forth to the rescue and the liberation of the Old. 「……そんなことが起こるとは到底考えられないが、それでも万が一、国土が敵に蹂躪され人々が飢えにさらされるようなことが起こったとしても、海洋の向こうに広がる英連邦の軍が、イギリス海軍艦船と共に戦い続けるであろう、そして新世界がその巨大なパワーを挙げて旧世界を助けに登場してくるまで、我々は戦い続けるであろう。」⁽⁷²⁾

いかなる状況が出現しようと戦い続ける、妥協はしない、降伏はありえないというチャーチルの宣言は、その言葉の裏に、イギリスの歴史を、伝統を、体制を、何としても守り抜かなければならないという深い悲壯感を秘めたものだった。フランスがドイツに敗れるという状況が迫っている、そうなればイギリスはヨーロッパにおいて孤立する、自分たちの信じる民主的政治体制を、ヒトラーの軍隊が破壊しようと攻撃してくる瞬間が迫っているのだという悲壯感である。以後の苦渋の道を何としても乗り越えていくという自らの責任と、それを国民に共有してもらおうのだという決意の表明であった。それに加えて、特にアメリカに向けて、万が一ヒトラーのヨーロッパ制圧という悪夢のシナリオが実現したとしたら、それはアメリカにとってとてつもない脅威になるだろう事を示唆し、訴える演説でもあった。

ダンケルクからのイギリス軍脱出後も、フランスにおけるドイツ軍の攻撃は激化していく。フランス北部の大きな部分はドイツ軍の蹂躪するところとなり、パリ防衛が困難になっていった。ずっと東のライン川から西側の海岸地帯まで、フランス+イギリス軍65個師団が、北側のドイツ軍124個師団とぶつかり合う巨大な戦闘の局面が出現していた。6月5日、9日、15

日と特に激しい戦闘が行われた⁽⁷³⁾。前線は崩れて行き、戦況はますますフランスにとって不利になって行く。

6月10日ついにフランス政府はパリを離れて、パリの南西方向ロワール川沿いにあるツールToursに移ることになる。(この日、イタリアはフランスとイギリスに対して宣戦布告した。イタリア軍が国境を越えてフランスに侵入。)フランスに戦い続けてもらいたいチャーチル政権は、ダンケルク以前からフランスに残り続けている兵力に加え、ダンケルクの後にも新たに2個師団をノルマンディーに送ったのであるが⁽⁷⁴⁾、このうちの1個師団の一部約8000人は、6月12日ロンメル率いる第7戦車師団によってソム川河口のサンバレリーSt. Valeryの海岸に追い詰められ、フランス兵約4000人と共に捕虜となった⁽⁷⁵⁾。(もう一つの師団はカナダからの師団だった。)

13日チャーチルはツールに飛んでレノー仏首相と会談する。レノーは、ペタン副首相やヴェガン最高司令官たちがドイツと休戦するべきだという主張を強めていることをチャーチルに話し、チャーチルは必要ならフランス政府を更に南に移し、あるいは地中海を越えて植民地まで引くことになっても、あくまでも戦い続けるべきだとレノーを応援する。この日の夜、フランスの閣議は、ツールよりも更に南のボルドーBordeauxに政府を移すことを決定し⁽⁷⁶⁾、翌日14日、ボルドーへ移った。同じ日の14日、ドイツ軍はパリに入る。

ボルドーに移ったフランス政府には、16日夜の閣議後に大きな変化が起きた。この時の閣議では、政権内のレノー首相などの抗戦派とペタンなどの休戦派が対立し、休戦派がついに多数を占めてレノーは辞任することになった。そこでペタンが新たに首相となる。ペタンは17

日、ドイツに対して休戦を要請し、フランス軍に対し戦闘行為を停止するよう命令したのである。そして22日、ドイツとフランスは停戦文書に署名し、フランス・ドイツ間の戦争はここに終結した。停戦Armisticeとはいえ、フランスが実質的に降伏したことは明らかだった。世界に誇る伝統ある陸軍を擁したフランスだったが、ヒトラーのドイツとの本格的戦闘が始まるのが5月10日。実質的降伏に至るのが6月22日である。こうなるまで僅か44日しかかからなかった。

6月半ば以降、つまりダンケルクからの脱出後も、フランスにいた英軍および英軍関係者(輸送、通信、医療、軍関係事務など)の数は、10万をはるかに超えていた。前線の崩壊、ペタン政権の登場、独仏停戦交渉などの大きな混乱の中で、英軍と関係者たちはソム川河口付近からボルドーに至る海岸線の間の港湾や海岸に続々と退却し、イギリスから派遣された艦船に救助されて、また多くの犠牲者を出しつつイギリスに逃れていった。その数は約2万人のポーランド兵も含めて191,800人に上ったという⁽⁷⁷⁾。脱出劇はダンケルクだけではなかったのである。ダンケルク、その前後の小規模な数々の脱出、そして上記の19万人強を加えると、フランスでの戦いの期間にイギリスに脱出する事の出来た人数の総数は558,032人、そのうち368,491人がイギリス人だった⁽⁷⁸⁾。

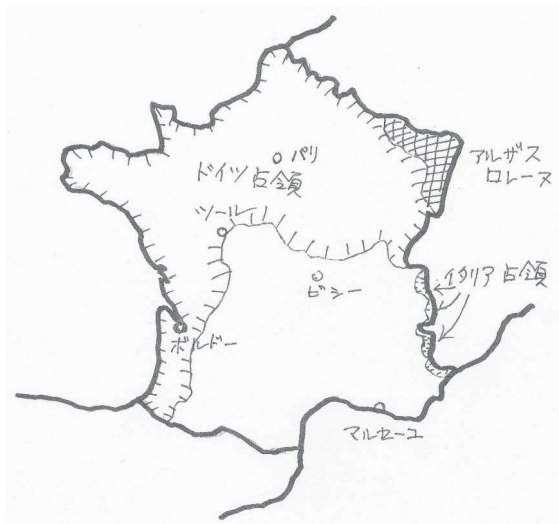
さてナチスドイツとの停戦合意によって、フランスは大まかに言って3つの地域に分割されることになった。パリを含むフランスの北半分および全ての海岸線は、ドイツの占領下におかれる。イタリアとの国境付近では、イタリアによる占領が行われる。そして残りはフランス政府が統治を続けることとなった。国土の半分以下である。またアルザス-ロレーヌ地方は、ド

イツによる民政が敷かれこととなり、ドイツに併合される形になったのであった。フランス政府（7月1日にヴィシーに移る）が統治を続ける部分についても、ドイツはその統治に大きく干渉した。

イギリスにとって、同盟国フランスがヒトラーに実質的に降伏してしまったことは、極度の衝撃だった。しかしその衝撃に立ち止まっている余裕はイギリスにはなかった。フランス降伏直前の時点でも、次の段階への準備を進めなければならなかった。準備は極めて多岐にわたりそれぞれが重大なものだったが、そのうちの一つは、フランス海軍の艦船の問題だった。フランス敗北を覚悟したイギリスにとって、降伏後にフランス海軍艦隊がどうなるのかは最大級の懸念となっていた。これがドイツの手に渡ってしまえば、ドイツの海軍力を大きく増強させることになり、それはイギリスの防衛に重大な脅威となる。首相になる前に海軍大臣だったチャーチルであるが、戦局が決定的に不利となってきた5月末以降、彼はフランス海軍トップのダーラン Darlan 海軍大将とレノー仏首相

に対して、いかなる事態になろうとフランス艦隊がドイツのおちることが無いよう何度も念を押すことになった。パリでも、ツールでも、ボルドーでも、チャーチルがフランスに渡るとにそれを強調した。ダーランは、どんなことになってもドイツにフランス艦隊を渡さない、万一どうしてもなくなったら、艦長たちには船を自沈させるよう命令してあるとチャーチルに確言した。チャーチルはついに、フランス政府に対して、もしあなた方がドイツに対して停戦の条件を問い合わせることをするというならば、あなた方はフランス艦隊をイギリスのもとにおくようにすべきであると要求する⁽⁷⁹⁾。しかし、ダーランが“ドイツには何としても渡さない、万一の時は自沈させる”と断言したものの、イギリスはそれ以上の約束を引き出せないままフランスは事実上降伏した。

フランス海軍艦船の主力は、ツーロン Toulon 軍港など国内にあったが、その他に、イギリスのポーツマス、プリマス港に停泊している艦隊、エジプトのアレクサンドリア港にいる艦隊、アルジェリアのオラン Oran 港およびオランに隣接するメルセルケビール Mers el



ドイツによるフランスの分割占領

ebir 港にいる艦隊、またその他に、カサブランカ (Casablanca モロッコ)、ダカール (Dakar セネガル)、マルチニーク (Martinique 島ドミニカの近く) にもいた。フランスのペタン新政権は、これらをドイツ海軍に乗っ取られないようダーランを先頭にして、最大限の努力をしたという。これらの艦隊はどうなったのだろうか。チャーチルの説明は次のようである。

ドイツとの停戦合意書ではその第8条において、フランスはその植民地の利害を守るための船舶以外の艦船は、以後指定される停泊地に向かい、そこでドイツ、イタリアの監督のもとに武装解除 demobilized or disarmed される、またドイツ政府は、フランス艦船を自らの目的のために使用しないことを厳粛に宣言するものと定められていた⁽⁸⁰⁾。しかしイギリスにしてみれば、ドイツのこのような“厳粛な”宣言など……ヒトラーが今まで国際的公約を破り続けてきたことを考慮すれば……誰が信用できるものかということだった。ましてやその第8条は、ドイツは沿岸警備と機雷掃海のためならば、フランス艦船を使用できると例外規定をもうけている。つまり解釈によっては、フランス艦船を沿岸警備用だ、機雷掃海用だとして幾らでもドイツ海軍の中に取り込めるのではないかとイギリス側は判断した。

イギリスは、フランス本土 (ツーロン) にある仏海軍を除き、本土の外にある主な艦船を、説得によってイギリス側に来るように誘導し、しかし説得が受け入れられない場合、必要ならば武力でこれを叩くことを決意した。カタパルト Catapult 作戦という。7月3日、イギリス海軍は動いた。

イギリスのポーツマス、プリマス港に停泊していたフランス艦船に、イギリス海軍部隊が乗り込み、これを押さえた。フランス大型潜水艦上では撃ち合いがあり、英兵2人、フランス兵1人が死亡するということが起きたが、大事に

いたらず取捨した。エジプトのアレクサンドリア港では、イギリスの地中海艦隊司令官のカニングム Cunningham 提督とフランス艦隊指揮官が交渉の上、フランス艦船の燃料を抜き取ることに合意し、実行された。オランとメルセルケビールのフランス艦隊は、ジブラルタルから出撃したくイギリス艦隊 (空母を含む) の司令官ソマービル Somerville 海軍中將の説得を拒み、その結果激しく砲火を交えることになる。フランス艦隊は戦闘中に地中海に逃れた重巡洋艦1艘を除き、あとは撃沈されるか大破、座礁する。ダカールでは、7月8日に英艦隊が攻撃、戦艦リシュリユー Richelieu が大破、マルチニークではアメリカ軍も介入してフランス艦船は航行不能となった。

これらのイギリス海軍の攻撃は、つい“昨日まで”同盟国だったフランス政府 (7月1日にヴィシーに移っていた) の怒りを誘い、ペタン政権は7月5日イギリスと断交を宣言した⁽⁸¹⁾。とはいえ、ペタン政権はイギリスに宣戦布告することはしなかった。フランス艦隊の主力は軍港ツーロンにあり、これはカタパルト作戦の対象外だった。ツーロンの艦隊はどうなったのだろうか。時間的に少々先回りをするようになるが、これに触れておく。42年11月、ツーロンの艦隊のほとんどは実際に自沈してしまう。ドイツはこの時までこの艦隊には確かに触れなかった。しかし42年11月にアメリカ、イギリス、ドゴールの自由フランスの連合軍が北アフリカに上陸すると、モロッコ、アルジェリア、チュニジアなどの (ヴィシー政権下の) フランス軍はすぐに降伏してしまう。これを仏独停戦合意への裏切りとみたドイツは、フランス全土の占領を宣言し、軍港ツーロンもその艦隊も接收しようとする。この時、ダーランの艦隊自沈の命令が実行に移され、フランス海軍艦隊は実質的に消滅した。その後ダーランは、42年12月4日付でチャーチルに宛てて書簡を寄せ

る。その中で彼は、“40年6月当時、閣下に対して状況によっては海軍艦船を自沈させると何度も確約しましたよね”と強調したのだった⁽⁸²⁾。ダーランのプライドと無念さを吐露したものであろう。（ダーランはその3週後に暗殺される⁽⁸³⁾。）

このようにして降伏後のフランス艦隊に関するイギリスの重大な懸念、ドイツに渡ってしまったら大変なことになるという悪夢のシナリオは、ダーランの命令のおかげで最後まで現実化しなかったのだった。

4. バトル・オブ・ブリテンとそれに続くイギリス本土大空襲（ブリッツ Blitz）

フランスでの軍事情勢がますます深刻化するにつれ、イギリス側はヒトラーの軍隊が次には自分たちのイギリス本土に当然襲いかかってくるものと身構えた。我々は自国で敵と戦わなければならないという意識が急激に強まって行った。そしてフランスが事実上降伏し、ドイツ軍とイギリス本土を隔てるものは、英仏海峡だけになった。オランダ、ベルギー、フランスの海岸線は全てヒトラーの陸、海、空軍が押さえるところとなっていた。ドーバーと対岸のカレーの間は直線距離で40キロもない。

40年5月27日、ダイナモ作戦でダンケルクからの脱出が開始された時点で、イギリスの統合参謀部は報告書を提出し、ヒトラーは本格的な上陸攻撃をしかけてくるであろう、それに対し英海軍だけでこれを無期限に阻止し続けることは困難であり、英空軍が制空権を確保できるか否かがイギリス国土防衛の鍵となるとの判断を述べていた⁽⁸⁴⁾。

5月28日、チャーチルによって全ての大臣が招集され、情勢の報告、検討がなされる。ダ

イナモ作戦が始まったばかりであり、ことによったら十万人のイギリス兵が犠牲になるかもしれない、そうなったら……という切羽詰まったタイミングでの会議だった。会議の最後にチャーチル首相は、“ダンケルクで何が起ころうとも、もちろん、我々は戦い続ける Of course, whatever happens at Dunkirk, we shall fight on “と締めくくることが、これに感激した大臣たちは”首相、その通りですよ、素晴らしい！ “Well done, Prime Minister!!” と涙を浮かべて拍手を送り、チャーチルの背中を叩く者もあった⁽⁸⁵⁾。何があっても戦うぞという意識は、国民の間に広く共有されていたようで、フランスでの戦闘が始まった頃から一般市民による“国土防衛隊 Home Guard”（最初“地区防衛ボランティア隊 Local Defence Volunteers”として発足、その後改称）が組織され、これに参加する市民の数は瞬く間に100万人を超えた。一方では本土での戦争という恐ろしいシナリオに対する意識、もう一方ではヒトラーに負けてたまるかという闘争心が市民の間に広まっていたのである。そして7月10日以降、バトル・オブ・ブリテンが始まる。（ドイツ側では8月13日がバトル・オブ・ブリテンの開始としている⁽⁸⁶⁾。）この戦いは、後に述べるような理由によって、主にイギリス空軍戦闘機軍団（Fighter Command）とドイツ空軍（Luftwaffe）の間で戦われた空軍どうしの対決という内容になったのであるが、もちろん広範なイギリス市民社会が影響を受けることになった。（イギリス空軍には戦闘機軍団の他に、爆撃機軍団 Bomber Command と沿岸飛行軍団 Coastal Command があった。）

4.1 イギリスの陸軍、海軍、空軍の状況

ここでフランスの事実上の降伏前後におけるイギリスの陸、海、空三軍の状況を見ておきたい。まず陸軍である。ダンケルク撤退の際、イ

ギリス陸軍がダンケルクの海岸に、大量の武器、弾薬、物資を放棄せざるを得なかったことは既に述べた。また、ダンケルク以後もソム川河口～ボルドーまでの海岸からも非常に多数のイギリス兵や軍属、ポーランド兵などが脱出してイギリスにたどり着いたことも述べた。このようにして、イギリス国内の陸軍兵士の数は増強されたと言える。しかもある種の防衛の役割を果たしうる一般市民の国土防衛隊の人数は150万人のレベルまで増加して行き、ドイツの戦車軍団が上陸してきた場合に備えて、進路となりそうなところに障害物を設置したり、またドイツの空挺団が（ノルウェーやオランダのロッテルダム攻撃の時と同じように）イギリスのどこかに落下傘で降下してきたときには、これを仕留める備えを整えようとした。チャーチル首相も、you can always take one with you（自分が倒れる時は敵を一人道連れにできる）⁽⁸⁷⁾ といっているのではないか。

またオーストラリアからパレスチナに向かう途中だった派遣第2陣の第18旅団をイギリスに呼び寄せ、新たにもう一個旅団を編成させてイギリス防衛兵力に加えた。

しかし、陸軍の部隊にせよ市民の国土防衛隊にせよ、カナダ、オーストラリア師団にせよ、上陸してくるドイツ軍と戦うには、武器、兵器が明らかに不足していた。対戦車砲などの重火器、機関銃、ライフル銃、それらの弾薬などである。またイギリス陸軍が保有する戦車の数は、機甲師団1個師団分どころかその半分にも届かないという状態だった⁽⁸⁷⁾。

戦車という兵器を世界で初めて作ったのは第一次世界大戦中のイギリスだった。しかし海軍を主とし、決して陸軍強国ではなかったイギリスは、戦間期に戦車という新兵器の増産、機甲師団の増強をしてこなかった。第二次大戦のフランス戦線におけるイギリスの戦車部隊は、ドイツの機甲軍団に対し比較にならないほどの規

模だった。イギリスは戦車生産を急いだものの、ドイツが投入すると想定される機甲兵力とは大きな差があったのである。フランスの戦場における機甲軍団を先頭としたドイツ陸軍の迫力と比べて、イギリス陸軍（+国土防衛隊+カナダ、オーストラリア師団）の戦闘力は明らかに見劣りした。

海軍はどうだったのだろうか。以前から世界最強の海軍力を誇り、また1930年代にアメリカ海軍と同等のレベル（ワシントン軍縮条約）を維持していたイギリス海軍は、40年時点でも、ドイツの海軍力と比較して圧倒的に強力と判断されていた⁽⁸⁸⁾。しかし既述のように、ドイツは5月末にはオランダ、ベルギーの海岸線を押さえ、6月末にはフランスの海岸線も押さえってしまう。そのことは、ドイツ空軍がその海岸線近くから作戦を展開することが出来ることを意味した。そうすると、ドイツ軍のイギリス本土への攻撃に関しては、〈イギリス海軍〉対〈ドイツ海軍〉の戦いではなく、〈イギリス海軍〉対〈ドイツ海軍+ドイツ空軍〉を考えなければならないことを意味した。こうなると、イギリス海軍だけでは……これも既述のように……ドイツの上陸作戦を無期限に阻止し続けるのは困難になると判断された。イギリス空軍がこの戦力比較の計算式の中に不可欠の要素として入ってこなければならぬ。

空軍に眼を転じる前に、かなり重要な一つのことを見ておこう。それはこの時点で、イギリス側が、ドイツ海軍が前節で述べたスカンジナビア半島での戦いにおいて、大きな打撃を被っていたことを必ずしも明確には認識していなかったことである⁽⁸⁹⁾。イギリスは、ドイツには強力な大型艦船の艦隊が控えているのではないか、これがあの強力なドイツ空軍と連携して陸軍を運び、イギリス上陸作戦を敢行してくるのではと懸念したのだった⁽⁹⁰⁾。

さてイギリス空軍はどうだったのだろうか。空軍に関しては、それがバトル・オブ・ブリテンの主演であり、イギリスの命運を担うことになっただけに、叙述が少々長くなる。既に述べたように、イギリス空軍は1936年以來、3つの軍団、つまり爆撃機軍団、戦闘機軍団、沿岸飛行軍団に分かれていた。爆撃機軍団は、敵地や敵の艦隊を爆撃攻撃することを目的とするものであり、他方で戦闘機軍団は、攻撃してくる敵の爆撃機、戦闘機に対して戦う防御の役割を担っていた。また沿岸飛行軍団は、偵察とイギリスに入って来る自国や友好国の船団を敵の潜水艦や艦隊の攻撃から防衛する役割を負っていた。ドイツ空軍 Luftwaffe が、イギリス上陸作戦を行うための陸軍兵、戦車、重火器、物資などを載せた海軍艦隊と共に出動してくるならば、この Luftwaffe を迎え撃つのは戦闘機軍団だった。その司令官の地位にあったのはヒュー・ダウディング Hugh Dowding 空軍大將だった。

ダウディングは、非常に慎重な空將だった。40年5月中ごろ、フランスでの戦況がどんどん不利になる中で、フランス政府はイギリス空軍、特に戦闘機編隊の追加派遣を強く求めてきた。16日緊急会議のためにパリに飛んだチャーチルは（ガムラン仏軍総司令官の絶望的な戦況説明“aucune” 前述……を聞いた後）、イギリスの10個戦闘機中隊 fighter squadrons のフランス派遣の要請を（ロンドンの戦時内閣の賛成を得て）受け入れた。しかしそれを聞いたダウディングは、内閣に対してフランスへの戦闘機派遣が、イギリスの本土防衛の今後を考えた時にいかに危険であるかを、これまでの戦闘機軍団の機体数変化のグラフを示しつつ必死に説明する。本土の防衛のためには52個飛行中隊が必要であるが、既にフランスに多数の飛行中隊が送られ、戦闘で失われた機数も多く、自分の直接の指揮下には現在36個飛行中隊しかない、

そこから更に10個飛行中隊を引き抜かれたら……と訴えた。自分の反対意見が受け入れられそうにないのを見たダウディングは、無言で着席し会議室のテーブルの上に静かに鉛筆を置いたという。鉛筆が静かに置かれたのを見た内閣の大臣たちは、ハッと考え直し、戦闘機中隊のフランス派遣を思い止まった。歴史学者 A. J. P. テイラーは、この鉛筆こそがイギリスを救い、バトル・オブ・ブリテンでイギリスに勝利をもたらしたのだと述べる⁽⁹¹⁾。

ダウディングは、ドイツとの対決において自分の指揮下の戦闘機軍団が決定的なカギとなることを確信していた。戦闘機軍団を温存すること、そしてそれを死に物狂いで増強することがいかに重要であるかを肝に銘じていたのである。

戦闘機の生産に関して、ダウディング空將には強力な味方がいた。航空機生産大臣ビーバーブルック男爵である。ビーバーブルック男爵はもともとカナダ人のビジネスマンであり、多岐にわたるビジネス活動で大きな成功を収めていた。1910年イギリスに移住し彼のビジネスはさらに拡大した。同時に政界にも進出し、ビジネスと政治の両方で影響力を増大させていった。貴族になる前は、彼のもともとの名前、ウィリアム・マックスウェル・エイトケン William Maxwell Aitken として知られていた。数々のビジネス活動に加え、デイリーエクスプレス Daily Express という小規模な新聞社を購入し、これをイギリス最大の発行部数を誇る新聞に成長させ、さらに世界最大の発行部数を達成してニュースペーパー・バロンと称されるようになる。チャーチルと非常に近く、チャーチルが1940年5月10日に首相となった後、5月14日に航空機製造省の大臣に任命されたのだった。

航空機製造省 Ministry of Aircraft Production は、チャーチル内閣が設置した新たな省であるが、それまではそのような省は存在しなかった。それまで軍用の航空機設計、製

造に関して権限を持っていたのは空軍省 Air Ministry であり、その中の兵器物資供給部門 Supply Branch であった。空軍の枢要性を認識しているチャーチルは、第一次大戦時の経験をふり返り、航空機の製造と設計を空軍省から切り離して、独立した新たな省に担当させることが必要と決断した。そしてそのトップに盟友でありビジネス界で赫々たる実績のあるビーバーブルック男爵を任命したのである⁽⁹²⁾。ちなみに、チャーチルが新設した省庁はこの航空機製造省のみである。

イギリスの防衛のためには空軍力がカギであり、その中でも戦闘機戦力の維持、増大が何よりも重要であるということに関して、戦闘機軍団司令官ダウディングと航空機製造大臣のビーバーブルックの意見は完全に一致していた。爆撃機や他の種類の航空機生産にもまして戦闘機生産こそ最優先順位を与えられるべきという意見である。(実はこの意見は、イギリス空軍内部に広く共有されていた意見ではなかった⁽⁹³⁾。爆撃機軍団への注力を主張する上級幹部も多かった。)

大臣ビーバーブルック男爵はスピットファイアやハリケーンなどの戦闘機生産システム強化に即座に着手し、部品の供給管理、そして損傷した航空機の修理、修理できない機体からの部品回収と再利用のシステム拡大、市民たちにアルミ製フライパンや鉄鋼製品の供出を訴えるなど、死に物狂いの努力を、大臣就任と同時に始めたのだった。

イギリス空軍には、戦闘機軍団の他に、もう一つ強力な武器があった。それはレーダー網である。初期のものであったが、国内各所にレーダーが設置されてレーダー網が国土の多くを覆っていた。これがイギリス上空に近づこうとする敵の航空機の存在を感知し、それに対して戦闘機編隊が即座に出撃する体制が、科学者達とダウディングのリーダーシップのもとで出来

上がっていた。これがあるために、敵の空軍の襲来に対して(レーダーが無い場合よりもはるかに)効率よく迎撃できた。レーダーの開発には、ナチの迫害をのがれてオーストリアからイギリスに亡命してきたユダヤ人科学者も参加していたのだった⁽⁹⁴⁾。

レーダーは急激に開発が進み、対空砲台や飛行機そのものにも設置されていくようになる。

これらの努力はイギリスの歴史にとって……のみならず世界の歴史にとっても……偉大かつ重大な意味を持つ成功につながって行った(具体的数字は参考文献 8 Appendix C)。

バトル・オブ・ブリテンが始まる前のイギリス三軍の状態はおおよそ以上のものであった。次に、ドイツ側の状況はどうだったのかを見ていく。

4.2 イギリス侵攻に向けてドイツ軍の状況

ヒトラーは、フランスを事実上の降伏に追い込んだ後、すぐにイギリス攻撃を開始したわけではなかった。ドイツ軍が……より正確にはドイツ空軍 Luftwaffe が……本格的な攻撃作戦を開始するのは、フランス降伏後ひと月ほども経った後だった。それには様ざまな理由があった。

ヒトラーたちは、フランスがこれほど短期間のうちに軍事的に崩れてしまうとは予想していなかったらしい⁽⁹⁵⁾。フランスのペタンが和平文書に署名した段階で、ドイツ軍はイギリス侵攻のための具体的な計画を持っていなかったのである。チャーチルの回想録は、ドイツ敗戦後に捕獲されたドイツ政府内部資料を読んだ上で書かれたものであるが、それによると、ドイツ軍総司令部(Supreme Headquarters)が、「総統は、幾つかの状況が満たされるならば……その状況のうちの最重要要素は、我が空軍が制空権を確立しているということであるが……イギ

リスへの上陸侵攻がありうると判断された」ので The Fuehrer has decided that under certain conditions—the most important of which is achieving air superiority—a landing in England may take place, と説明した上で、そのイギリス侵攻計画を作るようにとの最初の指令を7月2日、陸、海、空軍に対し発したのだった。

ヒトラー自身が侵攻作戦の準備を開始せよと指令したのは7月16日である。それにはこうあった。「イギリスは、自らの軍事的状況が絶望的になっているにも関わらず、それを受け入れようとしていない。そこで私はイギリス上陸作戦を準備することにし、必要ならばそれを実行することに決定した。8月半ばまでには作戦準備を完了せよ。」Since England in spite of her military hopeless position shows no sign of coming to terms, I have decided to prepare a landing operation against England, and if necessary to carry it out…The preparations for the entire operation must be completed by mid-August⁽⁹⁶⁾. この上陸作戦が Operation Sea Lion と呼ばれる作戦だった。(Sea Lion というのは、トドやアシカのことでもあるが、上半身がライオンで下半身が魚類という架空の生物を意味することもある。)

ヒトラーは、このシー・ライオン作戦の準備をしておくよう命じた3日後の7月19日、イギリスに対し平和を呼びかける演説をする。テイラーによれば、ヒトラーはイギリス帝国 British Empire は認めるものの、イラクやエジプトはドイツの傘下に入ること、イギリス首相にはチャーチル以外の人物が就くことを示唆したのだった⁽⁹⁷⁾。

イギリスはこのヒトラーの和平提案を、外務大臣ハリファックス卿の7月22日のラジオ放送を通じて払いのける brushed aside。ヒト

ラーが作り出そうとしているヨーロッパと、イギリスが守ろうと戦っているヨーロッパの姿は正反対のものである、我々はヨーロッパに自由が再建されるまで戦いを止めない。実はハリファックスがこのような形でイギリス政府の正式回答を発する以前、ヒトラーの和平提案が出された直後から、イギリスの新聞やBBC放送は、政府に言われなくとも、そんな和平交渉はダメだと強く反応したのであった。7月20日にベルリンでヒトラーと会っていたイタリアの外相チアーノ Ciano（ムッソリーニの娘婿でもある）は、英国メディアのきっぱりとした拒否反応を見たヒトラーがイタリア側に対して、イギリスはもうすっかり弱体化していてわが軍が攻撃すればすぐに崩壊するのに……と述べたことを記録している⁽⁹⁸⁾。

ヒトラー自身はチアーノにはこのように述べたものの、ドイツ陸海空三軍の間には、イギリス攻撃作戦に関して緊密な話し合いや協調が進んでいたわけではなかった。むしろ三軍それぞれの思惑は一致していなかったのである。そのことは、イギリスへの上陸・攻撃作戦の実施方法にも、結果にも重大な影響を持つことになった。

ドイツ海軍は、以前からイギリス海軍の方が自分たちよりもはるかに強力であることを認識していた。ましてヤスカンジナビア半島での戦いで被った大きな損失の後である。5月、6月の段階で海軍トップのレーダー Raeder 海軍大将は、イギリス上陸作戦に関してヒトラーに注意すべき問題について説明していた⁽⁹⁹⁾。7月になってヒトラーの指令を受けて海軍が用意した作戦は、英仏海峡が最も狭くなるあたりを選び、フランスとイギリスの間に、海上の通路を設けることだった。フランスの海岸のグリ・ネ Gris-Nez やその他の海岸地点に強力な砲台を置き、イギリス側や海峡を砲撃できるようにしてこの海の通路を守る。通路の脇に機雷を設置

し、通路に沿ってUボートを配置してこれを守らせる。その上で陸軍をのせた海軍艦船がこの海の通路を通過してイギリスに向かい、上陸させ、次々に物資を運ぶというものだった。(英仏海峡間の最短距離は34キロ。)

7月21日にヒトラーは三軍のトップたちと作戦会議を開く。ヒトラーは、この作戦には陸軍40個師団が必要であり、それを支える大規模物資輸送も必要で、そのためには制空権を確立していなければならないし、また英仏海峡の気候条件は9月後半には非常に悪化すると予想され、10月中旬には霧が軍事行動に影響を与えることから、作戦は9月15日までには終了させることと命じた。

この会議では特に陸軍と海軍の意見が激しくぶつかり合った。陸軍は、ドーバーからライム湾に至る長い海岸線に兵力を上陸させること、またドーバーより北のラムスゲートにも部隊を上陸させる作戦を提案した。それに対して海軍は、上陸を安全に実行しようというならば、それはノースフォアランドとワイト島の西端あたりまでの地点を選んでもらうということだと反応する。それを聞いた陸軍は、それでは海軍の言うとおりに地域を狭め、幾つもの海岸地点に即座に10万人、次に第2波として16万人を上陸させると主張する。ブライトンあたりには少なくとも4個師団、ディール-ラムスゲート間にも部隊を上陸させる。これらの海岸線に少なくとも13個師団を同時に上陸させることが是非とも必要なだと説明した。また空軍は、対空高射砲 A. A. batteries 52 を第1陣の海上輸送で上陸させることを要求した。

これに対して海軍は、陸軍が要求するような多数の上陸地点に、それほど大規模に、素早く、安全に兵力や装備を輸送することは出来ないと反対する。海軍が提案しているのは、ノースフォアランドとワイト島の間の長い海岸線から最善と考えられる一地点を選んで、そこに上

陸させるということだ、空軍が制空権を確立していたとしても、海軍にとって同時にいくつもの船団を出して大兵力や物資を輸送することは不可能だ、英仏海峡の最も狭いところを渡って上陸するという作戦ならば困難さが最小になるということだと主張する。

しかし、上陸地点を一地点に選んで……ということは、ドイツ陸軍には到底受け入れられなかった。陸軍から見れば、そんなことをするのは、全くの自殺行為だ、兵をソーセージ製造器に押し込むようなものだ……。陸軍と海軍の意見の対立は続いた。8月半ばには準備を完了せよというのがヒトラーの7月16日時点での指令だったが、基本的な作戦計画の作成は長引いた。結局ヒトラーが折衷案を出し、それを基に8月27日、ドイツ軍総司令部は指令を発する。上陸はフォルクストーン Folkestone とボグノール Bognor の間の海岸線、上陸軍は13個師団からなり、予備軍を12個師団とする。(さらに若干の変更が加えられ、上陸軍第一波は11個師団となった。) 総司令官はルンドシュテッド Rundstedt 元帥。上陸軍は二手に分かれ、一方の第16軍はより東側のハイズ Hythe、ライ Rye、ヘイスティングス Hastings、イーストボーン Eastbourne などに上陸、もう一方の第9軍はより南側のブライトン Brighton やワーキング Worthing 付近に上陸すること。この作戦は、ドイツ空軍がイギリス空軍を破り、制空権を確立した段階で実行する⁽¹⁰⁰⁾。

実は、このような内容のシー・ライオン作戦が決定される前から、ドイツ空軍とイギリス空軍との戦闘は始まっていた。ドイツが支配しドイツの海軍船舶が往来するドイツ、オランダ、ベルギー、フランスの海岸線の港湾の幾つかをイギリス空軍が爆撃し、逆にドイツ空軍は英仏海峡を往来するイギリス海軍や民間の船舶を爆



イギリス南部海岸，ドーバー海峡に面するフランス海岸

撃し、また次第にケント州（フランスに最も近い）を爆撃するようになった。もちろんそれに伴い迎撃が行われた。イギリスは、ドイツ空軍がこのような攻撃のレベルを上げ始めた7月10日をバトル・オブ・ブリテン開始の日とし、ドイツはシー・ライオン作戦に向けて独空軍によるイギリス本土南東部の本格的攻撃（イーグル作戦という）を始めた8月13日をバトル・オブ・ブリテン開始の日としている⁽¹⁰¹⁾。このように両空軍の爆撃活動がすでに始まっている中、8月27日に発出されたドイツ総司令部の指令により、イギリス上陸作戦（シー・ライオン）にむけて、ドイツ海軍、ドイツ陸軍は準備を加速させた。我々は、我が空軍 Luftwaffe がイギリス空軍 Royal Air Force RAF を打ち破った段階で即出動する!! かくして、ドイツ陸、海軍は、空軍 Luftwaffe がいつイギリス空軍 RAF を圧倒するか、固唾をのんで注視することになった。

4.3 Luftwaffe 対 RAF 空中戦：バトル・オブ・ブリテン

ドイツ空軍司令官はヘルマン・ゲーリング Hermann Goering 元帥（Reichsmarschall 国家

元帥）だった。ゲーリングは第一次大戦時に戦闘機パイロットおよび戦闘機編隊指揮官として頭角を現し、早い時期からナチに入党しヒトラーの信任あつく、ナチ政権内 No. 2 の地位にあり、ヒトラーは彼を後継者に指名していた（Roger Manvell, Goering Britannica 参照）。ゲーリングの Luftwaffe は、ポーランドはもちろん、スカンジナビア半島での戦闘でも、オランダ、ベルギーでも、フランスにおける戦いでも、赫々たる戦果をあげていた。ゲーリングは自信满满だった。イギリス空軍を打ち負かすだど?! いや Luftwaffe による空爆だけでイギリス全体を打ちのめしてやる!!⁽¹⁰²⁾

ゲーリングは、イギリス空軍との対決に2669機を用意した。爆撃機1015機、急降下爆撃機346機、戦闘機933機、重戦闘機375機⁽¹⁰³⁾。これを迎え撃つイギリスのRAF 戦闘機軍団の機数は、バトル・オブ・ブリテンの期間（7月10日～9月15日）最大で749機だった⁽¹⁰⁴⁾。

既述のように、8月13日ドイツがイギリス本土南東部を攻撃し始めるイーグル作戦以前から両空軍の戦いは始まっていたのだが、ドイツ

空軍は海峡の船舶を攻撃するだけでなく、イギリス戦闘機軍団をさそいだしてこれを叩くために、ケント州に爆撃機+戦闘機の編隊を何度も送るようになった。7月10日～8月10日の間にドイツ空軍が失った航空機は227機、イギリス側は84機を失った⁽¹⁰⁵⁾。同じような数字だが、Taylorによると、7月10日から8月12日までにドイツは約300機、イギリスは約150機を失ったとある⁽¹⁰⁶⁾。この間、英戦闘機軍団の司令官ダウディングには、空軍の最上層部や政府から、指揮下の戦闘機を全て投入してドイツ空軍と全力で戦えという圧力がかかり続けたが、ダウディングは圧力に耐えて自制的戦略を維持し、次に来るに違いないドイツの更なる大規模イギリス本土攻撃に対して戦力を温存し続けた。

その攻撃は8月13日に始まる。ドイツ空軍の爆撃機と戦闘機の編隊はケント州などイギリス南東部に襲いかかった。テイラーによれば、この時の空中戦ではドイツは236機を失い、イギリスは95機を失った⁽¹⁰⁷⁾。次に8月15日、ドイツは爆撃機100機、重戦闘機 Me110 40機を投入してイングランド北部のニューカッスルやタインサイド Tyneside の工業地帯、飛行場を攻撃する。この時同時に、ドイツはイギリスの戦闘機編隊を南部に引き付けておこうとしてイギリス東南部500マイルの前線に、合計約800機を投入し最大級の攻撃を行う⁽¹⁰⁸⁾。ダウディングは、そのようなドイツの戦術がありうることを予測して、戦闘機軍団の中から7個飛行中隊 squadrons を予め東南部から引き抜いて、北部の防衛のために備えていた。ダウディングの作戦が的中し、ニューカッスル、タインサイドへのドイツ空軍攻撃に際し、イギリス戦闘機編隊はドイツの30機（主に重爆撃機）を撃墜する。イギリス側の被害はパイロット2人の負傷のみだった。この日イギリス北部および東南部における空中戦を合わせると、ドイツ軍機の損害は76機、イギリス機は34機だっ

た⁽¹⁰⁹⁾。8月11日から17日までの1週間に、ドイツ空軍は261機、イギリス空軍は134機を失った⁽¹¹⁰⁾。

ダウディングの極めて自制的効いた、かつ先見の明ある戦略と、ビーバーブルックの航空機製造省の懸命の努力によって、戦闘機生産は何とか維持ないし微増され、イギリス戦闘機軍団の戦力が減少することを防いだのである。

8月31日までの一週間にドイツ空軍の失った機数は193機となりイギリス空軍の損失は141機、9月7日までの一週間ではドイツの損失187機対イギリスの損失144機と激戦が続いた。ビーバーブルックたちの生産、機体修理の組織は、現場の労務管理の常識を全て無視して昼夜を問わず大車輪で回転し続けた。労働大臣ベヴァン Bevin（労働党からの入閣、労組幹部出身で労働者側の権利を固守することで知られていた）も全面協力した。国の運命がかかっていたのだ。7月10日時点のイギリス戦闘機軍団の出動可能戦闘機数656機、バトル・オブ・ブリテン終了後10日ほどたった時点（9月25日）の出動可能機数は665機だった⁽¹¹¹⁾。軍団の戦闘能力は維持された。

軍用機の機体数では、ドイツ空軍のそれが2669機に対し、イギリス空軍は7月10日時点で出撃可能な戦闘機656機+出撃可能爆撃機467機+物資輸送機128機=1251機⁽¹¹²⁾。単純な比較はできないにせよ、総機数でドイツは大よそ2.2倍。それでもイギリス空軍が負けなかった理由は幾つも考えられるが、ダウディングの鋭い先見性に基づく戦略、ビーバーブルックの生産・修理体制に加え、既述のように、レーダーの役割も大きかった。敵の編隊の襲来を素早く察知し、その情報に反応して戦闘機の編隊を出動させることが出来た。戦闘機軍団の機動性を、その当時の技術で最高のレベルを発揮することが出来たのは、イギリス本土に設置されたレーダー網があったこと、レーダーから

の情報を即座に分析して反応するシステム（ダウディング・システムという）を開発していたことが大きかった。

8月24日、ドイツ空軍機一機が命令に反し誤ってロンドンに爆弾を落としてしまうということが起きた。ヒトラーは大都市を破壊し合う爆撃戦を嫌って、このような攻撃を禁じていたのだという⁽¹¹³⁾。イギリスはこのロンドン爆撃に対する報復として、翌25日以降ベルリンを含むドイツの都市の夜間爆撃を行う。これに激怒したヒトラーやゲーリング達は結局ロンドン爆撃を決意し、9月上旬以降ロンドン空爆が激しくなって行き、9月15日（ヒトラーは7月下旬段階でこの日までにイギリスを降参させるシー・ライオン作戦を終了させよと命じていた……前述）には最大級の空爆が行われた。この時の空中戦で、ドイツ空軍は56機を失い、イギリスは26機を失った。（イギリス軍パイロットから戦闘機軍団に入ってきた報告では、ドイツ機185機を撃墜したとなっていたという。パイロットたちには、戦闘中の撃墜数を正確に数えるのが困難だった⁽¹¹⁴⁾。）この時の空中戦の際には、チャーチル首相は夫人と共に航空機軍団の中心である第11グループの作戦中枢を訪れていて、ドイツ軍の動き、イギリス戦闘機編隊への発進命令、戦闘状況の報告などが飛び交う“戦場”の中にあっただけだった。この日以後、ドイツ空軍の大規模な日中の攻撃が止んだ。9月15日の大空襲以後、ドイツの空爆戦略の焦点は、それまでのイギリス空軍撲滅から、ロンドンの首都機能破壊、産業都市破壊、イギリス国民の戦意を挫くことなどに移っていくが、空襲そのものは今までと同様、ロンドンや他の都市に対して、主に夜間の空襲が続いたのだった。9月から始まるロンドンおよび他の都市への空襲は41年5月頃まで続くのであるが、これをブリッツ Blitz（ドイツ語で稲妻の意）と

称している。

チャーチルの回想録『第二次世界大戦』は、バトル・オブ・ブリテンの期間にドイツ空軍とイギリス空軍がどれだけの軍用機を失ったかにつき、かなり詳細な記録を収録している⁽¹¹⁵⁾。それによると、空中戦が最も激しかった8月11日～9月21日の期間、ドイツは1008機、イギリスは597機を失う。7月10日～10月末と延長した期間をみると、ドイツの損失が1733機、イギリスが915機となっている。（イギリス空軍パイロットたちの報告では、ドイツの2698機を撃ち落したとなっていたという。戦後、ドイツ軍資料を入手した際に確認された数字が1733機である。）

結局ドイツ空軍は、イギリス空軍を打ち負かすことが出来なかった。叩いても、叩いても、イギリス空軍は戦闘機を何とか補充し、かえってドイツ空軍の被害はイギリスのそののほぼ2倍となり、制空権を確立することは出来なかった。イギリスの戦闘機軍団には機体数よりも、パイロットの確保の方が問題となっていくのであるが、これは、英連邦諸国のカナダ、ニュージーランド、オーストラリアのパイロットのみならず、ポーランド、オランダ、ベルギー、フランスから逃れてきたパイロットや、アメリカからの志願兵パイロットが参加することでパイロット不足も何とか補われた。

ドイツ陸軍、海軍は、“イギリス空軍が崩壊した時点で「即出動」!!”と固唾をのんで待機していたのであった。その陸、海軍にとって、状況は何とも焦燥に駆られるものだった。海軍の不満は、陸軍の不満と同じく深刻だった。イギリス空軍の反撃は強まりこそすれ、弱まっていないではないか！ これでは陸軍の大兵力を安全にイギリスに上陸させることなどどうていできない！

制空権が確立できないまま日にちが過ぎて行

き、イギリス上陸攻撃の最重要の前提条件は実現されないままだった。結局ヒトラーは9月17日、シー・ライオン作戦を当分の間延期することを決定する。更に10月12日、相変わらず空爆は続行するものの、ヒトラーは冬の間シー・ライオン作戦を棚上げにすることを軍に伝えたのだった⁽¹¹⁶⁾。(その後1941年7月、独ソ戦がすでに始まっていた時点で、ヒトラーは42年春までシー・ライオン作戦を再度延期する⁽¹¹⁷⁾。結局最後まで実行されることはなかった。)

ドイツ空軍がほぼ全力を投入したにも関わらず、9月中旬になってもイギリス空軍は依然として戦闘力を維持し、シー・ライオンを実行に移すことができなかったということは、第二次大戦においてナチドイツが経験した最初の重大な軍事的失敗だった。ドイツ陸軍がいかに無敵さを誇ろうとも、これをイギリスに上陸させて決戦を挑むことは、この時点で実行不能となったのである。(チャーチルによれば、ドイツ空軍司令官ゲーリングが空軍力でイギリスを屈服させることを諦めたのは9月27日だったという⁽¹¹⁸⁾。)

4.4 Blitz ロンドンなど都市への空爆

このように、ドイツはイギリス空軍の戦闘力を崩壊させることが出来そうもないことを受け入れざるを得ず、上陸作戦延期を決定したのであったが、ロンドンや他の都市への空爆は継続させた。大都市の機能をマヒさせること、イギリス国民の戦意を叩くこと、軍需産業を含むイギリスの産業組織を破壊しようということ等に目的が何度も変わった。(イギリスもベルリンを含む都市、工業地帯、燃料基地などを空爆した。)もちろん、イギリスはドイツが上陸作戦を延期したことも、その後それを更に棚上げにしたことも知らなかった。“あいつらは攻めてくるぞ”という覚悟と準備を解くわけにはいか

なかったのである。

ロンドン空襲は9月7日～11月3日まで、平均約200機の規模で毎晩続いた⁽¹¹⁹⁾。その後もアップとダウンを繰り返しつつ、夜間の無差別爆撃は(独ソ戦が始まる直前の)41年5月頃まで継続された。一般市民の住宅地帯にも、バッキンガム宮殿、国会議事堂、首相公邸、政府機関などお互い近接しているところにも、また鉄道、下水処理施設などにも爆弾、焼夷弾が落とされた。

9月から被害が出始め、議会関連の建物とそのごく近くにも10数回にわたって爆弾がおとされる。そのため下院議会は、チャーチ・ハウスと呼ばれる英国国教会の本部が置かれている建物に移動した。この移動は国民にも秘密にされ、議会の開催日も秘密にされた。ドイツに情報が洩れたら極めて危険だったからである。41年5月10-11日夜の空襲では、下院議事堂 Commons Chamberが爆弾のほぼ直撃を受け、天井が落ち、議長席も階段状に並ぶ議員たちの席も全て跡形もなくなり、壁の一部のみが残るだけとなってしまった。貴族院の議事堂に落された爆弾の方は、不発のまま天井と床を突き破って地下にもぐり、こちらも使用不能となった⁽¹²⁰⁾。(国会議事堂が再建され、イギリス議会が再建された議事堂で開かれるようになったのは1950年10月26日である。BBC News 26 October 2020 記事)

チャーチルは、首相公邸への爆撃を考慮して、公邸から近くにある頑丈な構造の財務省の建物の地下で執務するようになっていた。(バッキンガム宮殿やセント・ジェームス公園にも近い。)この建物はアネックス Annexe とよばれ、地下には1939年9月の開戦直前に、戦時を想定して通信設備や、会議室、居住施設などを備えたスペースが設けられていた。戦時中、イギリス政府の閣議はここで開かれ、このスペースが戦争指導の中心となったのであった。

ウォー・ルームとよばれ、ここは現在でもイギリス戦争博物館（5つある）の一つとして維持されている。

チャーチルや彼の前任のチェンバレンが懸念した通り、首相公邸（Downing No. 10）は爆撃の目標とされた。No. 10と財務相公邸（Downing No. 11）の間に爆弾が落ち、No. 10のキッチン大きな窓が粉々に割れ、食器や調理道具がすっかりダメになるということも起こった。10月17日のことである。チャーチルはその日の夕刻公邸にいたが、直前に悪い予感にかられキッチンに駆け込み、調理スタッフを全て地下のシェルター（No. 10にもシェルターが用意されていた）に大急ぎで避難させて、彼らを被害から守ったというエピソードが紹介されている⁽¹²¹⁾。

Blitzの最中はもちろん、第二次大戦の期間を通じて、イギリスの議員たちも閣僚たちも、ロンドンに留まって極力通常に近い執務のパターンを守った。空爆に耐えて世界最大の都市ロンドンに住み続ける数百万の市民たちと同じように日々を送ることに努めたのである。

ロンドン市民の生活も、特に40年9月以降は空爆により重大な影響を受けることになった。彼らはハイ・エクスプローズィブ High Explosive HE といわれる高性能爆弾、焼夷弾、時限爆弾、落下傘で落とされる機雷などの脅威に日常的にさらされていた。9月上旬から11月初めまでに、ロンドンには13,561トンの爆弾が投下されたという⁽¹²²⁾。イギリス議会の資料では、Blitzの期間中に、イギリス全体では市民約4万人が空爆で命を落とし、その半分以上はロンドン市民だった⁽¹²³⁾。（またこの資料では、戦時中の民間人の死者数は約7万人としている。Blitzの期間の市民の死者の数に関しては、別の数字もあって、3万人以上とするものもある⁽¹²⁴⁾。）民間の住宅の被害も非常に多数にのぼり、350万以上の家屋が全壊ないし半壊

のダメージを受けた。ロンドンでは夜間の空爆を避けて、あるいは住む家を無くしてしまったために、非常に多数の市民が夜になると地下鉄の駅および線路で寝泊まりするようになり、ロンドン市民の7人に1人は地下鉄を住みかとするようになったという。とはいえ、ロンドン市民の約60%は夜も自宅で過ごし、空爆の脅威に耐え続けたのだ⁽¹²⁵⁾。

市民たちの住居の庭には、アンダーソン・シェルター Anderson shelter というシェルターを埋め込んで防空壕にすることが政府によって勧められた。これは大抵（トタン屋根のような）波形になった鉄板でできた小さな小屋のようなもので、屋根、両脇と奥の壁、および前面の扉からなり、これを半分または全部地中に埋め、その上を土で覆い、爆弾の爆発から身を守るものとされた。空襲警報が鳴ると、人々はここに入って危機をやり過ごそうとしたのである。少なくとも1990年代には、ロンドンでも、地方都市でもまだ庭にアンダーソン・シェルターが残っている民家が幾つもあった。また、アンダーソン・シェルターの他に、モリソン・シェルターというものも考案された。これは鉄製の頑丈なテーブルの形をしており、空襲で家が破壊されてもモリソン・シェルターの下に潜り込めば、屋根や壁が崩れてきても、大人2人と子供2人が何とか危険を避けることが出来るとされた。

夜間には灯火管制が行われ、ストリートには灯りが無く、車のライトも禁止され、人々は窓に黒いカーテンをつけて灯りが漏れるのを防いだのだ。

子供の疎開 evacuation は戦争に付きものの現象であるが、イギリスにおいても39年9月3日の開戦直前から、子供や、未だ母親から引き離すわけにはいかない年齢の幼児や乳飲み子とその母親、出産を控えた母親、障害者などの

疎開の準備が始まっていた。ロンドン、バーミンガム、マンチェスター、グラスゴーなどから、39年9月1日からの3日間で約150万の子供や母親が疎開したとされている。この疎開計画をパイド・パイパー Pied Piper 作戦といい、戦争から子供を守ることを主目的とした計画だった。疎開は強制ではなく、自主参加制度だった。5、6歳の子供たちも母親から離されて、見知らぬ田舎の家庭や諸施設に疎開した。「まやかしの戦争 Phony War」の間に、彼らの約半数ほどは家に戻ったとされるが、40年5月にドイツがオランダ、ベルギー、フランスに攻め込んだところから再び疎開の機運が高まり、Blitzの期間には125万人が疎開ないし再疎開したとされる。太平洋戦争時の日本における学童疎開同様、イギリスにおいても、子供の疎開が非常に大規模に行われたのであった。

もちろん、都市に住む子供たちが全て疎開したのではなく、親元を離れなかった子供たちも多かった。当然のことであるが、危険を知りつつも幼い子供を手放すことが出来ないと感じた親も多かったのである⁽¹²⁶⁾。

疎開の経験は、子供に様々な影響を残した。イギリスの児童文学の中には、疎開児童の経験を基にした幾つもの小説がある。また、親から離れて疎開した子供たちと疎開せずに親と共にいた子供たちとを比較することで重要な児童心理学上の発見をしたアンナ・フロイト Anna Freud(ジグムンド・フロイトの娘)などもいた。

ドイツ空軍は、バッキンガム宮殿にも遠慮なく爆弾を浴びせた。40年9月13日の雨の日、国王ジョージ6世はウィンザー城(ロンドン中心から西方40キロ以内)から女王と共にバッキンガム宮殿に戻ったところだった。宮殿の居間に落ち着こうとしたところ、急降下爆撃機の爆音が近づき、ついに2個の爆弾が居間の向こうに見えるクォドラングル Quadrangle に落す

るのを見ることになる。(このクォドラングルは、王宮の中の建物の一つである。なおこの時は他にも4個の爆弾が宮殿敷地内に落された。)僅か70メートルほど先の建物で爆発が起こったのだ。爆風で居間の窓ガラスが割れたが、国王夫妻にケガはなかった。爆破された建物の水道管が破れ、そこから水が噴き出したのを国王夫妻は見た。この事件がジョージ6世自身の言葉で記録されている。チャーチルは侍従たちから報告を受け、国王夫妻が驚くほど平然とこれを受けとめたこと、危険をロンドンの臣民と共有できたことをむしろ喜んだ… pleased that he should be sharing the dangers of his subjects in the capital と記録している⁽¹²⁷⁾。

イギリス国民は、5月10日にドイツ軍がオランダ、ベルギーに侵入し、13-14日にはフランスに攻め込んだのを知らされ、戦争が身近に迫ったことを肌で感じたのだ。既に述べたように、オランダが降伏し、戦況が仏英軍にとってどんどん悪化して行き、ベルギー降伏、ダンケルクからの奇跡的脱出、ついにフランスまでが降伏してしまうという驚愕の後に、大規模空中戦および無差別空爆の開始……という展開を見て、“自分たちはヨーロッパにおいて孤立した、我々と共に戦ってくれるのは海の彼方にいる血を分けた同胞だけだ”との悲壮な認識がイギリス国民の中に定着する。イギリス人たちがこのような形で孤立感を味わうのは、130年以上も前のナポレオン戦争の時以来だった。しかしこの孤立感は、国民の意識をドイツに対する敵対心を固めていく方に作用したようである。国土防衛隊 Home Guard のことは既に触れたが、40年5月14日、イーデン陸軍大臣が地区防衛志願兵 Local Defence Volunteer LDV 結成を国民に呼びかけた際、一日で25万人がこれに応募し、6月末には140万人に達し

たのだった。7月にLDVはHome Guard国土防衛隊と改称され、42年末には160万人となり⁽¹²⁸⁾、ピーク時には179.3万人を数えた⁽¹²⁹⁾。開戦当時の徴兵制度では18-41歳の男子が徴兵の対象とされていたので⁽¹³⁰⁾、国土防衛隊に志願してくるのは中年より上の年齢層だった。彼らの間で、自分も国のために戦うぞとの意識が高まっていた現れである。

このようにして、ドイツはイギリスを屈服させることが出来ず、イギリスもドイツを屈服させるだけの軍事力（特に陸軍、そして空軍も）を欠き、お互い攻めあぐむ状況が続いた。両者の戦力のぶつかり合いは、後の論文で述べるように、ギリシャや北アフリカということになっていった。

最後に、空軍大将ダウディング戦闘機軍団司令官のその後に触れておく。ダウディングはバトル・オブ・ブリテンが過ぎてしばらく経った40年11月25日、軍団司令官の職から解任される⁽¹³¹⁾。何故解任されたのかについては、イギリス空軍の上層部の意見が彼の意見と合わなかったというような解釈はあるものの、今でも決定的な説明は無いようである。彼の貢献を高く評価しているように見えるチャーチルの回想録にも解任の説明は見当たらない。いずれにせよ、バトル・オブ・ブリテンの最大の功労者であったはずのダウディングは、以後表舞台から消えていった。何故だったのか筆者には不明である。

5. オーストラリア軍の参戦

オーストラリアは1939年中に、自国の海軍の主力をイギリスのために大西洋と地中海に送り出し、陸軍の精鋭部隊を40年初期に1個師団、中期から後期にかけてさらに2個師団をイギリスのために中東、イギリス本土に送り、空

軍の主力を39年後期から40年前期にかけてイギリスに送ったのだった。また陸軍1個旅団がシンガポールのイギリス軍指揮下に入った。

人口小国のオーストラリアの陸、海、空軍の規模は小さなものだったが、それらの主力をイギリス本土とイギリス勢力圏防衛のために出し、オーストラリア自身の国防のための兵力は更に小さくなった。これを敢えて受け入れた背景には、母国イギリスがドイツと交戦状態にある、我々は当然応援に駆けつけるべきだという大半の政治指導者及び大半の国民の心理があっただろう。それだけではなかった。オーストラリアが国防上の脅威にさらされた場合、イギリスの兵力は……イギリス本土が危機に陥っている場合以外……オーストラリアの安全を守るために駆けつけるという約束がイギリス政府によって与えられていたのである。このことを述べておきたい。

イギリスのためにオーストラリア軍の主力を差し出すのは当然と考えられてはいたものの、オーストラリア政府はそうした場合、自国の安全保障がどうなるかも当然考慮した。日本というアジア強国の脅威は無視できなかったからである。オーストラリア政府は39年9月15日、志願兵陸軍1個師団の募集を発表したが、これを何時海外に送るかは明確にしていなかった。（当時オーストラリア海軍は、イギリス海軍と行動を共にすることが当然とされていた⁽¹³²⁾。軽巡洋艦パースPerthは開戦前から大西洋にありイギリス海軍のもとで行動していた⁽¹³³⁾。）

開戦と同時に海軍大臣に復帰した対独主戦派のチャーチルは、オーストラリアに対して直ぐに陸軍部隊を海外派遣してイギリス軍と共に戦うべきだと圧力をかける。オーストラリアはまだ1個師団しか編成していないではないか、しかもそれは未だ本国に留まったままだ⁽¹³⁴⁾!! イギリス側との話し合いのために派遣されたオーストラリアの軍需相リチャード・ケイシー

Casey は、11月中旬の段階で海軍相チャーチルと会い、我々は軍を海外派遣することに勿論熱意を持っている、イギリスは日本の脅威に対してオーストラリアを守るという約束を守ってくれますねと念を押す⁽¹³⁵⁾。これに対し海軍相は、日本からの脅威の可能性は極めて低い、万一そちらが窮地に陥ったら、イギリス本土が危機にあるとき以外、我々は地中海沿岸を諦めてでも艦隊を派遣するとの覚書を渡す。これを聞いたチェンバレン首相は、自分が3月20日にオーストラリア政府に送った電報では、そのような形で他の義務よりもオーストラリアへの約束を優先させるとは明言していないが……と躊躇する。チャーチルはこれに対し、自分はどんな場合でも彼らへの約束を優先させるとは言っていないし、自分の言の内容は従来の英政府の線から出ていないはずと応える。

結局、イギリス政府は、日本の脅威に対しイギリスがどのように反応するかは、脅威の具体的な内容によるということをオーストラリア側に伝えるという条件で、チャーチル海軍相の覚書を了承した⁽¹³⁶⁾。もともといずれにせよ兵力を送るつもりだったオーストラリア・メンジス内閣は、これで国民にイギリスから約束を取り付けたぞと強調することが出来るということで、11月28日新設の1個師団を海外派兵すると公表したのだった⁽¹³⁷⁾。

1939年段階で、オーストラリア海軍 Royal Australian Navy RAN には重巡洋艦2、軽巡洋艦3、スループ2(+建造中のスループ2)、駆逐艦6(+既発注の駆逐艦2)、測量船1、その他があった。海軍将校430人、兵5010人。オーストラリア海軍参謀長サー・ラグナー・コルビンは、イギリス海軍中將だったが⁽¹³⁸⁾、オーストラリア海軍将校の中には、イギリス海軍から移ってきた者も多く、そうでない将校たちもイギリス海軍で訓練された者が多かった。兵の

間でもそのような経験を持った者が大勢いた。彼らは、大西洋、北海、地中海での軍役に慣れていたのである。

開戦とともにイギリスの英連邦自治領省(Dominion Office)は、既に英海軍と共にある軽巡洋艦パース Perth にくわえて軽巡洋艦1および駆逐艦5をヨーロッパ海域に送ることが、オーストラリア海軍の最善の貢献となると伝えてくる。11月7日、これら巡洋艦2と駆逐艦5はイギリス海軍省の監督下に移る。翌40年5月には、'オーストラリア'という船名の重巡洋艦も大西洋に送られ⁽¹³⁹⁾、巡洋艦3、駆逐艦5がオーストラリア海域を離れていった。それらの艦船と人員は、地中海や大西洋での戦いにおいて軍事活動に従事する。オーストラリア海軍の主体が、ヨーロッパ戦線に行ってしまうという状態が出現した。

オーストラリア空軍 Royal Australian Air Force RAAF も勿論、イギリス空軍 RAF にパイロット、無線通信士、航空砲手、整備士などを送った。ただしイギリス空軍で戦闘に従事したオーストラリア人は、RAAF から送られた空軍兵だけではなかった。RAAF の軍籍を離れて、イギリス空軍に籍を移したオーストラリア人、イギリスに在住していて最初からイギリス空軍に入隊したオーストラリア人なども、無視するわけにはいかないくらいいたようである。39年12月段階でイギリス空軍に属するオーストラリア人兵士の数は、オーストラリア戦争記念館の記録では、約450人、大部分がパイロットとされている⁽¹⁴⁰⁾。

オーストラリアは開戦以前にサンダーランド軍用飛行艇2飛行中隊 squadrons 分をイギリスに発注していて、そのうちの9機を受け取ってオーストラリアまで運ぶために、RAAF のパイロットたちをイギリスに送ってあった。飛行艇の操縦訓練や、英空軍の人員たちとの貴重

な交流をしつつ機体の完成、引き渡しを待っている間に戦争が始まったのであった。イギリス政府はオーストラリアに対し、この飛行艇と人員をイギリス空軍のために使わせてくれるよう要請してくる。オーストラリア政府はこれを受け入れ、機体と人員の多くは、第10飛行中隊 No. 10 Squadron としてイギリス空軍の沿岸飛行軍団 Coastal Command に編入され、第二次大戦を通じてヨーロッパで軍役に就いたのだった⁽¹⁴¹⁾。第10飛行中隊は、イギリス周辺海域はもちろん、ノルウェー沖、地中海から北アフリカでも任務に就き、イギリスの軍、民間艦船を魚雷攻撃するUボートへの爆撃、Uボートの犠牲になった船舶乗組員の救助、軍の要人へのフライト提供などで活躍する。オーストラリア人パイロットは、第10ばかりでなく、沿岸飛行軍団の中の他の飛行中隊にも配置されていた。

オーストラリア人のイギリス空軍人員は、沿岸飛行軍団ばかりでなく、戦闘機軍団 Fighter Command にも、爆撃機軍団 Bomber Command にも少数ではあれ参加していた。彼らは、第2節で述べたスカンジナビア半島での戦いにも、第3節のベルギー、ルクセンブルク、フランスの戦いにも参戦している。ダンケルクからの脱出の際には、イギリス本土から飛来した戦闘機が、イギリス船舶を攻撃するドイツ空軍と戦っているが、この中にもオーストラリア人パイロット数名の名前がみられる。また第10飛行中隊もここには参加した⁽¹⁴²⁾。第4節のバトル・オブ・ブリテンの空中戦にも少なくとも33人のオーストラリア人パイロットが参加している。ちなみに、これに参戦したニュージーランド人パイロットの数は、オーストラリア人パイロットの約4倍、126人となっている。(Royal Air Force Museum Battle of the Nations; History of the Battle of Britain 参照)

オーストラリア、イギリス、カナダ、ニュージーランドは、1939年末に帝国航空訓練計画

Empire Air Training Scheme EATS というものを立ち上げることに合意する。英連邦全体でエアクルー、主にパイロットを養成するための計画で、オーストラリア、ニュージーランド（カナダも）は、自国で基礎的訓練を施した後、高レベルの訓練をカナダで行い、それを終了した後イギリス空軍で軍役に就くというものだった。これは40年に始まり、オーストラリアからカナダでの上級訓練に初めて送られたのは40年11月であった⁽¹⁴³⁾。41年以降、オーストラリア空軍兵は、このEATSを経てイギリス空軍に編入されていき、パイロットの数が増えていった。後には、戦闘機軍団にオーストラリア人パイロット4個飛行中隊分、爆撃機軍団に7個飛行中隊分、沿岸飛行軍団に1個飛行中隊分、それに加えて中東で5個飛行中隊分のオーストラリア人パイロットが参加したのだった。

陸軍に関しては、オーストラリアは40年6月中旬から41年1月まで、イギリス本土に後に第9師団の中核となる部隊をおいて、本土防衛の一翼を担わせた。またイギリスが国家的利害が絡むと判断しているエジプト、パレスチナなどには、オーストラリアははじめ1個師団、後に3個師団を送り、オーストラリアは北アフリカおよび地中海東部地域におけるイギリス側の最大の陸戦兵力を提供することになったのだった。こうなった少々複雑な背景を見ていこう。

上述のチャーチル覚書から始まる一連の経緯を経て、イギリスからオーストラリア防衛の約束を取り付けたという形を踏んだ後、オーストラリアは40年1月10日シドニー港から第6師団の第16旅団を、先ずパレスチナに向けて出航させた。次に同師団の第17旅団が4月14、15日にかけてメルボルンを出港した。5月5日にはやはり同師団の第18旅団が、師団直属の工兵部隊、野戦砲部隊、その他の部隊と共にメ

ルボルンを出港した。もともとこれらの旅団は、パレスチナで集合し、訓練の後にはそこに留まるのではなく、イギリス陸軍とヨーロッパで行動を共にするものと想定されていた。しかし5月に入るとヨーロッパ大陸の緊張状態が高まり、オーストラリアからの派遣軍の任務にも重要な変更が加えられていった。なぜ、どのような変更が加えられたのだろうか。

5月1日、イギリス政府はオーストラリアに対し、それまで局外にあったイタリアが参戦し、地中海周辺が戦場になる可能性が強まっていることを伝えてくる⁽¹⁴⁴⁾。首相になったばかりのチャーチルは5月16日、ムッソリーニに宛てて、“両国間の溝が急激に広がっている swiftly widening gulf…が”，“イギリス国民とイタリア国民の流す血が川をなすような事態をストップさせるには……もう遅すぎるだろうか？ Is it too late to stop a river of blood from flowing between the British and the Italian peoples? という一文を含む書簡を送る。これに対しムッソリーニは、5月18日付で返答する。エチオピア問題について1935年イギリスが国際連盟によるイタリア制裁を主導したことに触れ、イギリスはポーランドを守ると保証した文書に署名したからには、名誉にかけてドイツに宣戦布告するのだというならば、イタリアも伊・独条約に署名しているからには、それを守ることに名誉がかかっている……とのべる。これを受けてイギリスは、イタリアがいずれ参戦してくることを覚悟したのだった⁽¹⁴⁵⁾。こうなると、北アフリカおよび地中海において、イタリアとの戦争への備えが早急に必要になる。エジプト、パレスチナにはオーストラリア第16旅団（およびニュージーランド1個旅団）がいて、ほどなく第17旅団も到着する。これらは訓練後ヨーロッパに向かうのではなく、そのままエジプトに留まり、現地のイギリス軍司令部（司令官ウェイベル Wavell 大将）

の指揮下に入り、情勢を見ることになった。

一方パレスチナに向かう途中だったオーストラリア第18旅団と師団直属の諸部隊は、イギリス政府とオーストラリア政府との交渉の結果、進路を変え、6月中旬にスコットランドに到着、その後本土南西部のソールズベリ Salisbury（近くにストーンヘンジがある）でイギリス本土防衛に就くことになった。第18旅団と共にイギリスに着いた師団直属の諸部隊は、新たに第25旅団を形成することとなり、後に第18と第25とでオーストラリア第9師団の核となる部隊を結成したのである。彼らはソールズベリと東部海岸近くのコルチェスターに分かれ、ドイツの来襲に対する防衛の楯の一部となった。

バトル・オブ・ブリテンが一応決着し、ドイツ陸軍の上陸の可能性が低くなった40年11月～41年1月というタイミングで、第9師団はエジプトに移っていく。（実はオーストラリア政府は、自国の派遣軍を自国の司令官……ブレイミー……のもとに、一つの集団として維持し。第16、17、18、25旅団などをバラバラにしたくなかったのである。第一次大戦では、ヨーロッパに送られたオーストラリア陸軍が、幾つもの命令系統にバラバラに引き裂かれ混乱するという苦い経験があったからである。）第9師団はエジプトに到着した後、第6師団と、新たにオーストラリアで結成されエジプトに送られてきた第7師団と共にオーストラリア軍団 AIF Corps を形成して一つの兵力集団となり、その AIF Corps が一つの単位となって、エジプトのイギリス軍司令部の指揮下に入ったのである。

このようにして、オーストラリアの陸、海、空軍は、イギリス軍と共に、イギリス本土とイギリスの勢力圏とその政治、統治体制を、ドイツ・ナチズムとイタリア・ファシズムから守るために戦い始めたのであった。

ちなみに上記の第9師団は、1941年から42年にかけて、何度か部隊を入れ換えつつリビアのセレナイカにおけるトブルーク Tobruk の包囲戦、エジプトのエル・アラメインの戦いという北アフリカ戦線の重要な戦闘の主要戦力を担い、また43年～44年にはパプアニューギニア、ボルネオなどで日本軍と死闘を繰り広げた部隊である。これらは後の論文において触れる。なお、この拙論に続く論文では、エジプト、リビア、ギリシャにおいて繰り広げられた英連邦軍とイタリアおよびドイツとの戦いを、オーストラリア軍に焦点をあてつつ述べる予定である。

注

- | | |
|-----------------------------|------------------------|
| (1) 参考文献 28（以後単に参 28 などと表記） | (28) 参 7 p532 |
| (2) 参 18 p40 | (29) 参 7 p537 |
| (3) 参 18 p61 | (30) 参 7 p549-552 |
| (4) 参 22 p34, 参 7 p350 | (31) 参 7 p563-4 |
| (5) 参 7 p485 | (32) 参 7 p579 |
| (6) 同上 | (33) 参 8 p586 |
| (7) 同上 | (34) 参 17 |
| (8) 参 27 p93 | (35) 参 7 p588 |
| (9) 参 7 p517 | (36) 参 13 |
| (10) 参 22 p45 | (37) 参 14 |
| (11) 参 22 p46 | (38) 参 22 p48 |
| (12) 参 7 p517 | (39) 参 8 p8 |
| (13) 同上 | (40) 参 22 p48 |
| (14) 参 27 p91 | (41) 参 24 p148 |
| (15) 参 7 p483 | (42) 参 17 |
| (16) 参 7 p483-4, p545-6 | (43) 参 7 p433 |
| (17) 参 7 p484 | (44) 参 8 p27-30 |
| (18) 参 6 p9 | (45) 参 8 p27 |
| (19) 参 7 p365 | (46) 参 8 p29 |
| (20) 参 7 p479 | (47) 参 20 |
| (21) 参 7 p482-3, p498 | (48) 参 8 p28 |
| (22) 参 7 p509 | (49) 参 22 p50 |
| (23) 参 7 p521 | (50) 参 17 |
| (24) 参 7 p522 | (51) 参 22 p50 |
| (25) 参 17 | (52) 参 22 p51 |
| (26) 参 7 p540 | (53) 同上 |
| (27) 参 22 p48 | (54) 参 22 p33 |
| | (55) 参 22 p53 |
| | (56) 参 8 p42 |
| | (57) 参 8 p42-44 |
| | (58) 参 22 p58 |
| | (59) 参 8 p43 |
| | (60) 参 7 p431, 参 8 p26 |
| | (61) 参 8 p33 |
| | (62) 参 8 p47 |
| | (63) 参 8 p51 |
| | (64) 参 22 p56 |
| | (65) 参 8 p53 |
| | (66) 参 8 p67 |
| | (67) 参 8 p69 |
| | (68) 参 8 p86 |
| | (69) 参 8 p91 |
| | (70) 参 8 p102 |

- (71) 参8 p125
 (72) 参8 p103-4
 (73) 参8 p131
 (74) 参8 p130, 参23 p593
 (75) 参8 p135
 (76) 参8 p162
 (77) 参23 p593
 (78) 同上
 (79) 参8 p187-8
 (80) 参8 p205
 (81) 参8 p212
 (82) 参8 p203-4
 (83) 参8 p202
 (84) 参23 p596
 (85) 参23 p595
 (86) 参23 p606
 (87) 参23 p605
 (88) 同上
 (89) 同上
 (90) 参7 p649-651 独, 英海軍ダメージ
 (91) 参22 p55, 参23 p590の注2
 (92) 参8 p13
 (93) 参23 p597
 (94) 参12 p47
 (95) 参23 p600, 参8 p267
 (96) 参8 p267
 (97) 参23 p595
 (98) 参8 p230
 (99) 参8 p267
 (100) 参8 p269-270
 (101) 参22 p69, 参23 p606
 (102) 参23 p606, 参8 p285
 (103) 参8 p285
 (104) 参21
 (105) 参8 p299
 (106) 参23 p607
 (107) 同上
 (108) 参8 p286
 (109) 同上
 (110) 参8 p299
 (111) 参8 p643
 (112) 参8 p641-3
 (113) 参23 p606
 (114) 参8 p293
 (115) 参8 p299
 (116) 参22 p72
 (117) 参8 p287
 (118) 参8 p298
 (119) 参8 p302-3
 (120) 参4
 (121) 参8 p304
 (122) 参23 p610
 (123) 参26
 (124) 参23 p611
 (125) 同上
 (126) 参15
 (127) 参8 p334
 (128) 参23 p608 注2
 (129) 参5
 (130) 参25
 (131) 参23 p608
 (132) 参10 p11
 (133) 参10 p7
 (134) 参9 p23
 (135) 参9 p24
 (136) 参19
 (137) 参9 p29
 (138) 参10 p16
 (139) 参10 p25
 (140) 参1 p8
 (141) 参1 p6-7
 (142) 参1 p14, 18, 20
 (143) 参3
 (144) 参2 p85
 (145) 参8 p107-8

参考文献

- (1) Australian War Memorial Australia in the War of 1939-1945 Air Vol 3
- (2) Australian War Memorial Australia in the War of 1939-1945 Army Vol 1
- (3) Australian War Memorial Empire Air Training Scheme
- (4) BBC News 26 October 2020, 10-11 May, House of Commons, Bomb Incidents

- (5) BBC History-British History in Depth: The Home Guard and 'Dads' Army' -BBC
Germany 1933-44
Scandinavian Economic History Review, Dec. 2011 Routledge
- (6) Brooks, Alfred and Morris F. La Croix The Iron and Associated Industries of Lorraine and the Sarre District, Luxemburg and Belgium Department of the Interior, United States Geological Survey, US Government Printing Office 1920
- (7) Churchill, Winston S. Second World War Volume I Penguin 1985
- (8) Churchill, Winston S. Second World War Volume II Penguin 1985
- (9) Day, David The Great Betrayal Oxford University Press 1992
- (10) Department of Veterans' Affairs Australian Government Royal Australian Navy in the Atlantic and Mediterranean Commonwealth of Australia 2015
- (11) Fraenkel, Heinrich Hermann Goering Britannica
- (12) Hawking, Stephen A Short History of Time Bantam 1990
- (13) House of Commons Parliamentary Debate Hansard 07 May 1940
- (14) House of Commons Parliamentary Debate Hansard 08 May 1940
- (15) Huxford, Grace Child Evacuees in the Second World War: Operation Pied Piper at 80, National Archives, Prime Minister's Office
- (16) Karlblom, Rolf Sweden's Iron Ore Export to
Liddell-Hart, Basil Battle of France <http://www.britannica.com>
- (17) McGibbon, Ian New Zealand and the Second World War Hodder, Moa Becket 2003
- (18) National Archives the Cabinet Papers CAB65 Second World War CAB65/2 89(39)
- (19) Royal Air Force Battle of Britain; Royal Air Force, www.raf.mod.uk
- (20) Royal Air Force Battle of Britain; RAF www.raf.mod.uk aircraft production docu
- (21) Taylor, A. J. P. The Second World War an Illustrated History Penguin 1975
- (22) Taylor, A. J. P. English History 1914-1945 Pelican 1970
- (23) Taylor, A. J. P. The Origin of the Second World War Penguin 1971
- (24) UK Parliament Conscription: the Second World War UK Parliament <http://www.parliament.uk>
- (25) UK Parliament The Fallen-UK Parliament <http://www.parliament.uk>
- (26) 石垣泰司「戦後の欧州情勢の変化とフィンランドの中立政策の変貌」外務省調査月報 2000/No. 2
- (27) 鈴木英夫 第二次世界大戦とオーストラリア——その1 名城論叢第19巻 2018